

目 次

釋尊降誕を慶讃して(完結)	本多日生
信仰と修養	守屋貫教
釋尊と我日本文化	高楠順次郎
法華經講話(第二十八講)	小林一郎
記事	

○本部團報 ○寄附金維持及團費誌料領收

第十四年四月號



統

一

法附
人團
統

團
發
行

財團統一團趣意
法人

統一團ハ創立以來實ニ三十有餘年ヲ經
過ス其間内ニ佛祖正脈ノ法統ヲ闡明シ
外ニ我國精神文化ノ精髓ヲ宣揚シ能ク
萬代不易ノ大道ヲ擁護シ又能ク時代對
應ノ教化ヲ旺盛ナラシメ以テ文化ノ向
上發展ニ貢獻セリ此ノ光輝アル歴史ハ
決シテ他ノ追隨ヲ許サザル所ナリ
統一團ハ本團自身ノ活躍ノ外本團ガ母
體トナリテ幾多ノ子會ト事業トヲ產出
セリ其ノ首ナル者ニ就テ見ルモ天晴會
アリ地明會アリ講妙會アリ自慶會アリ
又知法思國會等アリ其街頭宣傳ノ如キ
炎々タル道念ヲ喚起シ多大ナル感動ヲ
與ヘタルヲ見シ 又著述出版ニ於テハ
大藏經要義 法華經要義 日蓮主義精
要 聖語錄等著書ノ量ハ實ニ等身ニ超
エ雜誌トシテハ毎月統一ト教トヲ發行
シ來レリ
統一團ハ過去ニ於テ如斯多大ナル法勳

ヲ有スル名譽アル正定聚ナルガ創立者
本多日生上人遷化後其遺命ヲ遵守シ進
ンデ法人組織トナシ新ニ本部ヲ建設シ
將來ニ向ツテ重大ナル任務ヲ敢行セン
ト欲ス 其中心ノ事業ヲ舉グレバ
第一佛祖正脈ノ法統ヲ擁護スル事 第
二我國精神文化ノ精髓ヲ體系的ニ發揮
スル事 第三此ニ適當スル學風ヲ振起
スル事 第四時代對應ノ教化ヲ研討シ
テ之ヲ實行スル事 第五小ニシテハ日
蓮門下ノ爲メ大ニシテハ我國文教ノ爲
ニ毎ニ覺醒ヲ促シツ、嚴然トシテ統一
ノ學風ト教化トヲ守持スル事はレナリ
教旨ノ正明 研學ノ淵達 活動ノ旺盛
此等ハ統一團ノ標語ナリ
定ニ佛祖ノ法統ヲ擁護シ我國ノ精神文
化ヲ闡明シ此ニ適スル教學ノ特色ヲ永
久ニ持續セントスル本團事業ノ翼賛ハ
最モ根本的ノ大善事ナルベシ 希クハ
同感ノ士女奮ツテ贊同アラン事ヲ爲法
爲國爲一切衆生切ニ懇望スル所ナリ

本團略則

- ◎目的 本團ハ日蓮教學ノ心髓ヲ闡明シテ佛祖正脈ノ法統ヲ擁護シ我國精神文化ノ精髓ヲ發揮シテ國民精神ノ根柢ヲ培養シ立正安國ノ大義ヲ宣揚シテ以テ理想ノ文明ヲ建設スベク街頭布教並ニ教化講演會ヲ開催シ又月刊雜誌「統一」ヲ發行ス
- ◎維持員 本團ノ事業ヲ翼賛シ一時金參百圓以上又ハ毎年金拾圓以上ヲ寄附セラル、方テ維持員トス
- ◎贊助員 一時金百圓以上又ハ毎年金五圓以上ヲ寄附セラル、方テ贊助員トス
- ◎正團員 一時金參拾圓以上又ハ毎年金貳圓五拾錢ヲ贈出セラル、方テ正團員トス
- ◎入團 御希望ノ方ハ密所氏名ヲ明記シ適當セル金額ヲ添附セラルレバ本誌ヲ無料ニテ頒布シ團章壹個ヲ贈呈ス
- ◎誌友 統一誌ヲ購讀スル方ヲ誌友トス

釋尊の降誕を慶讚して (完結)

日生上人

華嚴經の讚佛 (承前)

(本) 世の眞導師

又その次に

「善目照知して心に喜慶す 一切世間の眞導師 救となり歸を爲つて出現す」

と説かれて居りますが、これは人々の目を照らして、人々が善い事を見る眼を開いて下されるのであつて、その善い事を見て心に喜慶を生ずる、本當の目を開けて本當の導きをして下されるのがお釋迦様である、だからお釋迦様は世間の眞の導師である、他の導師といふのは小さな導師であつて、大導師といふものは釋尊に限る譯である、本當の救濟、本當の最後の吾々の頼りにする所となるものは釋尊である。一通りの救ひは醫者も病氣を救ふことが出来るし、一通りの頼りは亭主も頼りになるけれども、最後の頼りといふ時には亭主は役に立たない、いよゝ息を引取るといふ時になつて亭主の手に嚙りついたと

ところが「モウお前の手は冷たいナ」と言ふだけで「サアこれから先どうして呉れますか」と言つても亭主はどうすることも出来ない、生きて居る間は夫婦だけれども死んだ先はわからぬ。死んだ先などといふと非常に遠い別の事のやうに一般の人々は思つて居るけれども、人間の本体といふものは死ぬ時に本當にわかるのである、生きて居る間は騙されて居る。死ぬといふことを何かおかしな事に考へるけれども、死の刹那本當の人間が具現して來るのである、あとは髪を結うたり、白粉を附けたり、着物を着たり、指輪を嵌めたりして居る、それが人間だと思つて居るけれども、こんなものは何でもない、泥濘の中に轉がつて居る蛙の死んだのも同じものである。本當の自己といふものは魂の他はない、さうして見ると永遠の生命の問題である、生命といふものゝ落着くところの頼りになり、生命の手が握るところのものはお釋迦様の手だけである、人間同志の肉の手に絶つたところが、それは何の頼りにもならない。實にその有様といふものはこれを人生の裏面から考へて見ると憐れなものである。死んで行き居る時分には今まで頼りにして居つた亭主でさへも、「モウ愈々駄目だナ、下手に取悪かれたら大變だ」といふので皆逃出してしまふ、世間の有様は確にさうである、女房が取附いて「あなたもまだ若いから後妻を貰ひたいでせうけれども、モウ女房などを持たないで子供の事を頼みます」などと言はれたら困るから「いゝ加減の所で逃げて置け」……と言つて亭主は警戒して居る、それは實に宗教を有たない者の態度といふものは憐れなものである。私共は能くさういふ場合に行き合せて様子を見ることがあるが、モウ

死んだ晩などといふものは、殊に東京邊りの人は非常に怖がつて居る、それでどんな不信心の者でも必ず坊さんと呼ぶのである、だから死んだ晩などはお通夜と稱して、少々お経代が高くともその晩だけは是非來てやつて貰はなければならぬと言ふ、それは死者の菩提の爲でも何でも無い、自分達がビクビクして死靈が悪いたら大變だといふやうな譯ナンである。

どうしても本當の魂の行末に就つての眞の安心立命を與へ給ふものとして佛様が有難い譯である、だか

『生老病死憂悲の苦 世間を逼迫して暫くも歌むこと無し』

とあるとほり、たゞ死ぬとか別れるとかいふことがさう遠い事ではない、何時それがやつて來るかわからぬ、日々の新聞を見ても、この頃は思ひ掛けない人が多く死ぬやうである、私の寺の總代も晩方まで働いて居つて、明け方に意識がわからなくなつて翌日はモウ死んでしまつた。後藤新平氏も汽車に乗つて岡山の方に講演に行く途中で病氣になつて、遂に旅先で薨くなられてしまつた、それは後藤さんだけには限らない、何時誰がさうならないとは言へないのである。故に死が何時來つても宜しいといふだけの所謂臨終の心得を習うて置かなければならぬ、いつ何時、突然死が襲うて來るかも知れぬ、その時になつてあゝしまつたと言つても間に合はないから、チャント準備をして置くことが大事である。それには生老病死憂悲の苦世間に迫つて暫くも歌むことの無いこの苦しみを除く力、それが釋迦牟尼世尊の御

力なりとして、

「大師哀感して誓つて悉く除きたまふ」

そのお釋迦様に頼りさへしたならば、人生苦のすべてを根本よりお救ひ下されると申して居るのであります。

又その次に

「佛は一切の福の所依たり 誓へば大地の宮室を持つが如く 巧みに離憂安穩の道を示す」

佛様は一切の功德の所依である、誓へて見ればどんな家を建てるのでも大地が根本である、東京にも震災後の復興事業としていろいろの家が建ち居るけれども、それは悉く土地があつてその上に建てられるが如くに、人間の眞の幸福は大地の上に建てなければならぬ。釋迦如來を信する信仰の上から人生の幸福を組立てるならば、堅牢なる地盤の上に家を建てるやうなものである、さうなれば佛を信じて居る信仰が一切の物事の地盤になり、信仰が生活の根柢を築いて居るならば、憂を離れて安穩の人生を送ることが出来る。斯様な意味を交々讚佛偈として述べて居るのであります。

(一) 一番の妙法

次に「如來現相品」といふ所に

「如來の一音量り有ること無く 能く契經の深大海を演べ

普く妙法を雨らして群心に應ず 彼の兩足尊を宜しく往いて見たてまつるべし」

と説かれて居る、釋尊の御説教といふものは洵にわかり易いお話であるけれども、その中に深い眞理を述べられて、所謂哲學の大海の底を汲干すほどの尊さを籠めて與へられたものであるから、そこで釋尊の説法を皆妙法と言ふのである。この妙法の雨を降らして一切衆生をお救ひ下される、それは元來釋尊は人間の相をして出られたけれども、元は毘盧遮那身であつて、廣大無邊なる佛が人間を救ふ爲に出られて居るのである、釋迦如來と言ひ、毘盧遮那身と言ひ、法身と言ひ、絶對の佛として一つなるものであるといふことを呉れ、も説いて居る。その點に於ては法華經の壽量品も同じ事である、華嚴經で釋尊が非常な大きな立派な佛様のやうに説くのは、要するに成道を遂げたその現身の釋尊に於て廣大無邊を示して居るのである、その意味を推弘めれば即ちそれが壽量品となるのであつて、華嚴經の思想も壽量品の思想も開顯して見たならば全然一つのものである。

それ故に佛敎に於ては釋尊の功德といふことを考へるのが一番大事である、釋尊の功德より出でて吾が導きを受ける、その導きを受けたる信仰は常に自分の心が慈悲の心になつて、即ち優しい心になつてそこに歡喜が満ちて居らなければならぬ。そこで志が大きくなり、釋尊のなされるやうな事柄を縦ひ一部分でもお助けするやうな氣分になつて行く所に佛敎の信仰があるのである。随つて諸の拗けた

料簡、濁つた心を捨て、優しい歡喜の心になつて、志を大にして進んで行かなければならぬ。斯様にして佛教の信仰を説明されて居るが、やはり法華の信者も斯ういふ點を能く考へなければならぬ、佛の尊い事を考へて自分が慈悲の心になり、歡喜の心になり、志を大にして行くといふことになければならぬ、たゞ日蓮聖人ばかりが有難いといふやうに言つて、自分は少しもさういふ考が湧かなかつたならば、それは宜くない事である。日蓮聖人が有難いといふのは吾々の先生である、吾々は日蓮聖人に學んで、日蓮聖人と似たやうになつて行かなければならぬ、日蓮聖人の御志を繼いで、それに似たやうに働いて行くといふことを考へて行かなければならぬ。たゞ日蓮聖人は偉いと言つて上の方に祭り上げて、拜みさへしたならば病氣に罹らぬとか、泥棒が入らぬとか言つて、たゞ迷信の隊長にしてしまふ、『あゝいふ景氣の好い坊さんは無い、頭を斬らうとしても斬れなかつた、だからあれを拜んでさへ置けばどんな事があつても命は大丈夫だ』……さういふくだらない事に日蓮聖人を用ひてはならぬ。日蓮聖人は今申す尊き佛を念じて、命に及ぶ場合でも泰然として信仰の力に活きた、その手本を示されたのである。龍の口の法難の事などでも、たゞ一概に日蓮聖人が有難いと言ふよりも、あの時の聖人の態度を仔細に研究して、あゝいふ心持、あゝいふ態度を吾々が學んで、その十分の一なりとも自ら實行しようと思つて居るが日蓮聖人の思召であると言はなければならぬ。

(ト) 名 號 十 千

尙はいさ一つ附加へて置きたい事は、お釋迦様が一切の佛の活動の根本であるといふことを壽量品で説かれて居る、それは『名字の不同、年紀の大小を説く』と言つて、名號が違つて居らうが、年代が異つて居らうが、皆お釋迦様である、阿彌陀如來と言つても藥師如來と言つても何も別の佛ではない、釋尊の別名である。藥師といふのは釋尊が衆生の病を癒すことは立派な醫者のやうだといふ譬喩から藥師といふ名前が出て来る、阿彌陀といふのは無量壽といふことであるから、長い壽命であると言へば釋迦如來が久遠無量壽の本佛である、大阿彌陀如來が即ち釋尊である、大藥師如來が釋尊であるといふことが言へるのである。斯ういふ名號の相違などを以て別の佛が在ると思つてはいかぬといふことを壽量品は説いて居るのであります。

その意味は非常に大事な事でありますが、法華經には限らない、華嚴經にもハツキリその事は説かれて居るのであります、即ち『如來名號品』といふ所に文殊師利が申して居る、

『爾の時に文殊師利菩薩摩訶薩は佛の威力を承け普く一切の菩薩衆會を觀じて是の言を作さく諸の佛子よ、如來は此の四天下の中に於て或は一切義成と名け、或は圓滿月と名け、或は師子吼と名け、或は釋迦牟尼と名け、或は第七仙と名け、或は毗盧遮那と名け、或は瞿曇氏と名け、或は大沙門と名け、或は最勝と名け、或は導師と名く、是の如き等の名、其の數十千なり、諸の衆生をして各別に知見せしむ』

八
釋迦如來の御名號といふものは、一切經の中には十も百も千も限り無く名號が變つて出て來るけれども皆この釋迦一佛の御名號である、さういふ名號の異ふ爲に異つた佛だと思ふ考を切棄て、しまはなければならぬ。阿彌陀如來と言つても、藥師如來と言つても、皆釋迦如來の大慈大悲の説法の中に現れたる語に過ぎない、その根本に戻して釋尊の有難さを信解するのが佛教徒の本領である。これは一宗派の議論ではない、淨土宗や眞言宗の人が釋迦如來の向ふを張つて、阿彌陀如來があるとか、大日如來があるとか言つて釋迦如來の威徳を傷けたのは、實に佛敎の異端である。ちようと日本で言つたならば皇室が儼然として存するのには、その正統の皇室の向ふを張つて北朝を擁立するとか、或は政權武門に移つて遂に天皇の廢立を謀るに至る北條氏が出たやうなもので、觀音が出るとか阿彌陀が出るとかして、釋迦如來の御威徳を傷つけるといふことは、佛敎の正統信仰の上に於て許さるべき事ではない。これは洵に厄介な事で、あゝいふ宗旨が勢力を得て居る爲に、佛敎といふものは今日非常な禍ひを受けて居るのである。淨土宗のやうな悲觀的の敎があつて、それが佛敎の大部分であるやうに思ふ所から、道徳、敎育、宗敎の間に完全なる融合を圖る事も出來ずに居るのである。その罪は實に恐ろしい事である、早くあゝいふ思想を切棄て、阿彌陀様と言つたらその有難さを釋尊に移し、阿彌陀經と法華經との開顯融合を圖つてモット一切經を疏通して釋尊中心の上に一切經を活用する日が來なければならぬ。彼等は一宗派ある事を知つて佛敎ある事を知らぬ、たゞ僅かな情實に拘束されて人類の文化を思はないものである、吾輩は

釋尊降誕の聖日に於て、現在の佛敎各宗徒の不明暗愚を轉た痛感する次第である。今日は大恩敎主釋尊の御降誕の聖日に際會して一分佛徳を讃歎し奉つた事を歡喜とすると共に、この正法が彌々榮えて日本乃至一閩浮提に弘まるまでは、吾々は生れ更り死に更りしても如來の正法の爲に貢献したいと思ふ次第であります。
(完)

豫告

本月二十日前後に於て團員總會開催の筈に有之日時は追て御報告可申上此段豫告仕候

昭和十一年四月一日

財團 統一團
法人

信仰と修養

立正大學學部長 守屋貫教

一〇

一、自然と修養

人間は自然のまゝに放任して置いてはいけない。また人間は大自然と融合し大自然をその生命と爲すのがその本来である。

第一に人間は他の動物や植物と同じく自然の所産であるが、さりとて犬や猫と同じく自然のまゝで行けるものでない。人間は自然のまゝであれば食ひすぎる、墮落する、悪い事をする。犬や猫のやうにそのまゝ間違のない軌道を通つて行けない、動もすれば軌道からはづれる、その點に於ては人間の方が犬猫に劣るやうにも感ぜられる。

然しながら人間には、その過誤からその墮落からその悪事から自ら起ち上る力を持つて居る。昔から聖人賢人が人間には良心がある、善意がある、軌範意識があるなどといはれたのはそれである。この自分の力で自分を律する點に於て、他の動物よりも遙に勝れ、萬物の靈長といはるゝ所以である。例へば茲

に地方から東京に學問に出て来た洋村な青年がある。彼は國元に老いたる母を残し青雲の志を懷いて大に發憤して切磋琢磨の功を積んで居つた。然るに半頃悪友に誘はれて酒色にふけり、終には墮落の淵に沈み殆んど身の振方に困りきる程までになつた。さうして彼は下宿の二階で悔恨を惱みつゝあつた時國元から母親の慈愛切々たる書狀を得て一旦にして目がさめた。墮落に墮落して行つた彼は、その底から立ち上つて別人の如くなり、彼の學業を成し遂げ母親を安心させる事が出来た。かうした例は數限りなくある。そして私共も日々夜々墮落し行かんとする吾身に鞭うちて修養しつゝあるものである。

自然のまゝに置けば人間は墮落する、それでその墮落の淵から立ち上るのも、自然に與へられた聰明である。起きるも臥るも人間に與へられた自由である。人間にはいつも斯くくせねばならぬといふ風に、自ら鞭うちつゝあるものである、「せねばならぬ」といふことは「出来る」からである。つまり人間には墮落門と向上門との二つの門が開かれてある。そこに人間のなやみもあれば希望もある。墮落もすれば向上もする處に、人間が自覺して自律主義に依つて敢然として向上の一路を辿る處に、人間の人間たる所以の價値が存するのである。それでも修養の缺くべからざる所以はわかるのである。始終修養することに依つて、人間は墮落から遠ざかり向上の路へと進むのである。百姓が田畑を耕すやうに私共は動もすれば雑草の繁茂に委せんとする心身の修養を心掛けねばならない。

一一

第二に、自分で自分を律して行かう、自分の力で修養して行かうといふ仕方は、修養として尤な方法であらうが、それは道徳的修養人間中心の修養であつて、修養の極致といふ事は出来ない。考へて見ると人間の力など淺はかな小さいものである。それで修養など、鬼の首でも取つたやうに考へるのは利口に似て却て利口ならぬものである。

例を手近に取つて考へて見よう。庭前に一本の樹木一本の草花がある。それは大地に根を張つて居る。今その樹木その草花を大地から抜き去れば、枯死してしまふばかりである。樹木や草花は大地に根を張ることに依つて、大宇宙と生命を共にして居る、大宇宙と生命を共にすることは、はかなき樹木や草でありながら、宇宙の大生命をその生命とすることである。さればこそ彼等は亭々として天を摩すまでに成長し、紅、紫、黄、緑の様に咲き出るのである。

私共人間の宇宙の大生命に於ける關係も亦同じではないか。私共がその大生命から孤立して自分の力で立たうとするならば、私共の運命も草や木と同じく枯れ果てしまふ。自分で自分を律する自分の力で立たうなどいふ我欲をすて、宇宙の大生命に身心を託するならば、大生命はそのまゝ私共の生命となるのである。宗教上の信仰といふのはこの謂に外ならない。私共が佛を信するといふのは、自己の分別の心は、我欲をすて、佛の廣大なる力に歸依し、依つて以て佛の力を吾が力と爲すことである。印度では信仰といふ詞の意味は「前に坐る」ことであるとされて居る。前に坐るとは赤子が母親の前に坐るといふ意味である。子供は何等疑ふ所なく一身を母親に託し、母親の力を吾が力としてメキ／＼と成長して行く。彼は決して自分の力で成長して行くのではない。

それ等の例に依つて、私共が道徳的修養のやうに自分の力で行かうとするのは本當の修養でない。宗教的信仰に依つて宇宙の大きな生命を自分の生命とする處に修養の極致があることを知るであらう。

一體人間の子供の時の心掛は宗教的である、彼は無成心で感受的で周囲の一切のものを受け入れて行く。漸く成人すると自分の我といふものが出来、周囲に兎角反抗的になつて行く。更に壯年期になると肉體の欲望や名譽位置利益等さま／＼世間的の欲望にかられて、いはゞ一身は我欲で固まつてまた佛とか宇宙の大生命とかには頓と氣がつかない。それで老年になると人生の辛き經驗に刀折れ矢盡きて人間の力のはかない事をしみ／＼と悟り、再び子供の時のやうに佛の御胸に宇宙の大生命へと還つて行く。世間年老いたる男女は兎角信心深くなるのを見るが、人生の最後に至つて初めて氣のつくのは日暮れて道遠さが如きものである。人生の最後に於て人間の最大事に初めて氣がつくならば、それは宜しく人生の出發時に於て、我儘な青年時代に於て氣がつかねばならぬものである。もど／＼私共人間は一人の存在でない、横にも豎にも過去にも未來にも、世界の大きな生命と相つながらるものである。草でも木でも

石瓦でも人間でも宇宙一切が大きな生命に於て統一體である。佛を信することに依つて、私共のこのはかなき存在が大きな生命に生かされるのである。一人の力で自己の力で行かうとする道徳的修養は、結局滅亡の淵へと導くものである。宗教的信仰こそ大生命といふ常寂光土へ私共を導くものである。

三、受持といふこと

前節に依つて道徳的修養と宗教的信仰とのけじめ、特に信仰といふ事が分つたと思ふ。然し信仰したといふだけでは未だ充分でない。「信力の故に受け念力の故に持つ」と古人はいうて居る。私共は信力の故に宇宙の大法なり生命なりを受けることが出来る、それだけではいけない、念々相續してこれを持ち通さなければならぬ、それで佛教では唯信せよとばかりは教へない、これを受持せよと教へる。受持せよとは信仰を何處までも持ち通せといふのである、私共が朝禮毎に唱ふる御題目は唯之を口に唱へるばかりでない。日蓮聖人の思召に従へばこれを身口意の三業に受持することである。私共が一生懸命に之を唱ふるならば、それは自ら私共の意にしみ渡るであらう。またそれが意にしみ渡るならばそれはやがて私共の身の所作となつて顯はれるであらう。生活となり事業となつて顯はれるであらう。兎角人間といふものは、自分といふことが中心となつて世界に存在して居る、才能も名譽も位置も財

産も悉く自分に附いて居るものと考へて居る。自分と自分の持つ一切とを以て御互が對立して居るから世界は差別としてしか顯はれない。信仰とか受持とかいふのはそれと反對に、人間すべてが全體の中に大生命の中に生かされる事である。家庭の生活も、親子夫婦の間も、御互の交際も、各人の天職たる事業も悉く大生命に參することに依つて、世界は統一され國家は統一され人間は統一されるのである。私共がこの世に生活し活動して行くことは、畢竟この大生命を一步步に生活して行くことに外ならない。それを受持といふのである。

若し是經を聞いて毀訾せずして隨喜の心を起さん、
當に知るべし、已に深信解の相となづく、何に況んや、讀誦し受持せん者をや、斯人は則ちこれ如來を
頂戴したてまつるなり。

釋尊と我日本文化

文學博士 高楠順次郎

て居る間は、外國に向つても内國へ向つても、印度の繁榮すべき路が開けなかつた。

然るに一たび釋尊が印度の摩揭陀國に降誕せらるるや、印度の思想界は茲に一轉換期を作り、すべての思想は佛敎によつて統一せられた。其の後アソカ王、カニシカ王、グプタ王等の名王相踵いで現はれて、政治宗教美術文學建築等、種々の方面から各々印度文明の開發傳播に力を盡した。即ち藝術は菩薩扁鵲の如き名醫に至つて、進歩の絶頂に達し、文學藝術は馬鳴、カリーダーサに至つてその至純の域に達し、哲學も龍樹天親等が現はれて眞に完成せしめられたのである。尤も哲學としては佛敎以前にウパニシ

一

印度の文明は、今を去ること五千餘年前、世界に卒先して、其展開を始めた。然れども眞の文明は佛敎興起以後に至つて始めて認められることを得るのである。佛敎の未だ現れざる以前にあつて、印度に行はれた宗教は、云ふ迄もなく婆羅門敎であつたが、これは佛敎や基督教の如く世界敎に非ずして、所謂種族敎なるが爲めに、印度人以外の種族は、この婆羅門敎に入ることを得ず、又宗教を以て、他國に布敎傳道することもなすを得ず、一面甚だ束縛的な窮屈な宗教であつた。故に婆羅門敎が印度全土を支配し

二

ら發掘せられた斷片的彫刻等に依りて、其の面影を想像し得る丈である。然るに最後に佛敎の傳播した我國に於ては、堂塔伽藍を始めとして全國に散在せる佛像經卷等、一として釋尊の芳顔を偲はしめないものは無いと云つて可いのである。

三

釋尊の入滅後、間もなく、佛敎は、緬甸、錫蘭、暹羅等へ傳播した。之を第一期の傳道とする。これは所謂小乘敎であつて、巴里語によつて傳へられたものであつた。この第一期の傳道が終へて、凡そ、三千年間に渉り、何時とはなしに梵語によつて傳へられた大乘敎の傳道が行はれ、中央亞細亞ニ波羅ジャバ、スマトラ、支那、朝鮮、日本といふ様に東洋の全般に傳播せられたのである。而して現今に於ては、佛敎の源泉地たる印度に於ては、佛敎の生命は認められず、從つて殆んど釋尊の功績を認むべき資料が存し無い。只僅かに地下や諸處方々の洞窟か

印度では堂塔伽藍と云へば、大きな石窟から出來て居て、二階三階五階と色々の建方がある。而してその最大のものには優に千人を容るゝに足るのであつて、皆是れ佛敎時代の産物である。後のアチャンタの壁畫では世界第一の名品だと云はれて居る。然るに我國の大和法隆寺の壁畫は、此アチャンタの壁畫よりも、技術に於ては遙に進歩したものである。それが遺憾なる事には、今は破れた儘に放棄してある。我國は斯うして置いて其の義務が済むのであらうか。我國はたとひ戰爭に勝つても、かゝる美術品を

粗末にするやうでは、如何しても世界の一等國民にはなれないであらう。其他法隆寺の各建築彫刻等を見ると始めて釋尊の遺蹟を見る様な心地がせらるゝのである。貝多羅葉も法隆寺にあるのが世界で最古のものである。印度は熱帯地方であるから、四百年以前の貝多羅葉を保存することが出来ない。それ故に印度人其れ自身も自國古代の文化状態を法隆寺によりて研究する事が出来るのである。

要するに、佛像、佛具、貝葉、堂塔伽藍等、釋尊時代の印度の状態は、今は日本に於て始めて見る事が出来るのである。印度では何故にかくの如く古代の遺物を見る事が出来なかつたかと云へば、地震、洪水、火事、戦争其他年代の経過するに従つて自然に湮滅に歸したのである。前にも述べた如く、印度の堂塔伽藍は、元來、石窟を穿つて建てたものであるから、年代の経過と共に、其儘それが山となり、其の上に木が生へて、跡も分らぬやうになつて仕舞

した。然るに聖徳太子の自覺はさうでない、神は祖先なるが故に崇拜するのであるが、佛敎を信するの是自己の信仰の爲めである。故に兩者は同一のものでないとして佛敎を宣傳せられた。

かくて聖徳太子以來、今日に至る迄幾多の變遷はあつたが、佛敎の眞理は益々發揮せられて來て、印度の理想は日本に來て全く合致することが出來た。慈悲賢者慧恩天台等の佛敎學者は支那に於ては既に忘却の内に埋れて居るが、ひとり日本に於ては、學問としても今尙盛んに研究せられて居るのである。是れ蓋し偶然ではないと思ふ。

四

抑も佛陀とは人格の究竟を云ふので、その實例は釋尊によつて示された。釋尊に就ては法化報化應化の諸身あることは日本に在りて、何處に於ても之を見、之を聞く事が出来る。然るに印度に於ては古來

つたのである。それ故に、今日印度の地下に埋没せられて居るものを悉く發掘するならば、今日よりも立派な古代の文明世界を、出現する事が出来るかも知れない。斯くして印度の佛敎は先づ地下に隠れ、次ぎに中央亞細亞の佛敎も悉く地中に埋もれ、ジャバ、スマトラの佛敎も何時しか廢れ、支那、朝鮮の佛敎も衰微したのである。文明は凡べてその擲國があると駄目である。希臘の文明は羅馬に入り、羅馬の文明は歐洲大陸の全體を通り抜けてしまつた。朝鮮支那の文明も亦然り。併しそれが擲けずに停滞すると墮落するものである。今日錫蘭、西藏に佛敎の残つて居るのはその擲國がないからである。我國では或程度迄墮落したが、我日本の美術、文學等が凡べての文化の根本となり、社會的に生命をもつて文明を開發せしめたるは否定せられない事實である。佛敎が我國に傳播した時は、守屋などは日本には神があるから夷狄の神を祀るは不可なりと云つて拒絶

絶えて之を知る事が出来なかつた。何となれば、婆羅門教は他國へ布教する事の無い代りに、該教徒中には仲々の學者賢人が多かつたが、佛敎は四民平等主義であつたから、種々雑多の人間が翹集して來て學者賢人は比較的少數であつた。例せば、耶舎は一町人であり、純陀は一鍛冶屋であり、優波羅は一種多であつた。教團は主としてかゝる階級の人々の集合であつたから、釋尊の教への高尚なる部分は、彼等は解するに苦んだのである。釋尊は弟子に向つて「吾の如く修行せよ爾らば汝も亦佛陀たるを得ん」と教へられたので、當隨毘近の弟子千二百人は教の如く修行して居たが、佛滅當時阿羅漢(小我を捨て得た者)は四百九十九人(佛滅後行住坐臥を離れて自覺した阿羅漢を加へて五百人)であつた。彼等の多くは釋尊を唯の人間と見、僅かに師として仕へたに過ぎなかつた、即ち釋尊は修行して遂に佛陀となられたが、吾曹は師匠の大覺に至る事を得なかつた。然も師は涅槃に入

り給ふたと思ひ、人釋迦として信仰した。随つてターガタ (Tathagata) を如去の義となし、如に向つて去つて往かれた人と解した。即ち如去の信仰で、應化の釋尊と知つたのである。

然るに釋尊には、より廣大な、より深遠な一面があつた。大乘佛敎では釋尊は本來佛陀であるが、吾人を救済せんが爲に人間の相をとつて修行をして見せられたので、實は其の如より來生せられたものであると見る故に、釋尊以前には四佛五佛、二十五佛五十三佛等のあることを説いてある。之れ實に前の小乘敎が小人の乗物であると云はれる丈が眞如に對する解釋も進んで居る。即ち如とは其儘といふ事である。是を理想佛とも法身佛とも云ふて居る。即ち釋尊には法身報身と云ふ性格があつたのである。現在肉身の釋迦の裏に此久遠の相ある事を知らさうとして説かれたのが即ち「法華經」である。其中には八十八滅の人釋迦が其儘に理想佛なる事を示

し、諸法實相、世間相即常住、資生產業即佛敎、娑婆即寂光土を説いた敎へである。尙ほ人釋迦に執する者には「大般若經」に於ては文殊菩薩を標準として理想佛を説き、尙ほ固執を離れざる者には「大日經」に於て大毘盧遮那佛を理想佛として敎へ、金剛界(精神又は理)と胎藏界(現實又は事)を懇説し、徒らに現實主義にのみ拘泥する者には「大無量壽經」に依つて之を除去せられてゐる。其他種々の經典に於て、各方面から吾人を究竟の理想佛たらしめんと努めて居る。然るに印度の佛敎徒は、多くは愚物であつた爲めに、上述の理想佛に對する理解が出来ずターガタを如來と解して眞如より來生する義を顯すことを知らなかつた。然るに我國の京都嵯峨の梅檀の釋迦は、正しく「法華經」の釋迦を表象したものである。「般若經」は智慧の化身たる文殊菩薩を中心として、般若の智を説いたものであるが、其文殊菩薩の像は、大倉の圖書館を初めとして日本に

は澤山ある。又「華嚴經」は毘盧遮那佛によりて、法界緣起の汎神哲學を説いたものであるが、奈良の大佛は即ち此の如來を表象したものである。此「華嚴經」の理の曼荼羅に對して、同じ毘盧遮那佛が、其曼荼羅を説かれたものが、「大日經」であつて、眞言宗の大日如來は即ち其教主である。次に「大無量壽經」は一切衆生の欲求を根柢として説かれたもので、其中心の佛は即ち阿彌陀如來である。斯の如く印度で説かれた佛菩薩の諸相は、源泉地に於ては見る事が出来ないで、却つて我日本に來つて人民の禮拜の對象となつて今に遺物として存して居る。

佛敎は元來宗教であつて、又同時に哲學である。完全なる宗教、完全なる理想は、完全なる知識、完全なる情意より現れたものであらねばならぬ。佛敎が宗教であつて同時に哲學的の基礎を兼ねて居る事は吾人の智情意の三方面に向つて完全なる満足と與

へんが爲めである。吾人の全人格を實現せしめんが爲である。上求菩提の智慧を求めて、それを其儘働かせば、下化衆生の慈悲となるのである。智慧と慈悲、哲學と宗教とを結合するものは觀念修養の法である。之は佛敎には始めから具有して居るが、他の諸宗教に例の無い所である、斯くの如く完備した佛敎も、今は印度に於ては殆んど其跡を絶たうとして居て、却つて我國へ來ると、皆悉く其法が久住して居る。學問に於ては唯識三年、俱舍八年といふ努力も敢て吝まれぬ。觀念修養の法ばかり云つて居るのが禪宗である。禪宗には觀念の精神があつて、其方法が傳はつて居ないが、眞言宗に行けば、悉くその方法が具存して居る。其他敎として八家九宗に分れ律も亦大小共に具はつて居る。若し夫人人格によつて釋尊の遺風を傳へて居る人々を擧ぐれば學者としては、弘法、智證の如き、徳者としては聖徳太子、役の行者、親鸞聖人の如き、念佛では法然、題目で

は日蓮、法相唯識では玄昉、義淵の如き、興法利生では行基菩薩の如き、其他古來無數の僧侶信徒、皆是れ釋尊が無數に分身して、日本へ現はれたのではないか、日本は四面環海の島國であるから、吸收する一方で、未だ曾て吐出しなかつたのである。

五

斯くて釋尊の偉大なりしことは、日本に來つて明確になつたのであるが、併し印度に於て如何にして斯かる偉大な人格を生んだのであらうか。山川秀麗の氣自然に人を養ふとは古來より能く云ふことである。日本には富士山があつて、日本人の思想を養ふと能く云ふ。支那の揚子江の如きは廣大であるが汚濁を極めて居る。支那人の思想は之れに頗る類似して居るものがあるやうに思はれる。併し印度の自然の偉大なるには驚かざるを得ない。由來印度は景趣に富ます、今若し日本、支那の景

が聳えて居る。實にこの雪山は雨の日にも風の日に、も莊嚴な感じを帯びて居て、所謂美麗といふ氣分を超越して崇巖の域に達し廣大無邊である。かゝる感じは全く雪山に對して見なければ分らないのである。世界第一の高山が印度の大平野に對して聳えて居るのであつて、此の平原に立つて遙に雪山と相對する印度人の腦裡の印象は如何であらうか。その對照は頗る注目するに價する。佛教では三界は火宅の如しといふが、印度では之は單なる譬喩でない、熱い時は身動きもならない程で、汽車に乗つて居る時にも厚い帽子を冠り、窓を堅く閉めて、厚い毛筋を纏つて凝つと縮んで居るより外は無い。この火宅の中から、白雪皚々たる萬古の雪を頂く雪山を眺めた時は唯絶對無限、久遠無窮と云ふ觀念より外は無いのである。熱帯彼が如く平地彼が如き國に於ては、若し四邊の大山川なくば、何ぞ秀靈自然の妙を語る事が出來やう。唯大雪山地天に聳えてこの平地をな

色を以て印度を許せば、印度は養ふべき平坦無味の國土である。太陽も月も遠く野末より出で、又野末に暮るゝと云ふ有様で、恰も我が武藏野を幾百千も集めたやうな平原で、見渡す限り眼路を遮るものは一もない。汽車等に乗つても餘りにその地勢に變化がないので退屈を覺ゆるのである、印度の鐵道線には隧道只一ヶ處だと聞く丈けでも、其渺茫たる平原が想見せらるゝのである。斯かる平坦なる地に於ては、成程序文の長い華嚴の様なものが出てなければなるまいと思つた。然も地方に世界最高の雪山の連山が千古不滅の雪を戴き、恰も屏風の様に西にも東にも走る所を知らず一面に擴がつて居る。先年ニポールに行つた時は鐵道を離れて小籠に乗り七十五哩を七日間を費して行つた、八千尺位の山々を幾つも超えて行つたが、越した後を振り返つて見ると、山は赤楠花の赤い花が咲いて居る。谿には一面に綿の白い花が咲いて居て、其前面には氷の如き雪の山

し、氷雪千秋の雄姿は能く焦熱地獄の苦を忘れしめるのである。この絶景に對すれば、洋々たる恒河も滔々たる印度河も僅かに大雪山脈に源を發すると云へるに依りてその地位を保てるのみである。雨過青天の燃ゆるが如きエチナの海色を眺むれば、希臘美術の淵源を知り得べく、雪嶺千秋のヒマラヤの山容に對すれば、自から印度宗教の理想を味ふことが出来る。釋迦以前に多くの小釋迦が現はれて、この山を對象として觀念を凝したのである。その廣大無邊な印象を受けてそれを實現した時それが理想となつて示される。それを實現するには釋尊の如く偉大なる人格でなくてはならぬ。釋尊は固より佛として理想の高大なのに、更に此山に對せられたのであるから、其の絶對無限の威は譬へるものがない。佛の大覺を示すに、『淨自此說』とか『具足圓滿猶如雪山』と云ふ形容も、又佛顔を譬へるに『光顏巍巍』と云ひ『相好如金山』といふのも同じく雪山を見

て始て知り得らるゝものである。昔希臘では地球説
 が出たが、須彌山宇宙説は唯印度に於てのみ顯はれ
 得べき學説である。此の山の周圍に世界があると云
 ふ者は印度でなくては起らぬ思想である。釋尊は無
 師獨悟で師もなく證人もなく景勝無上の法を自覺さ
 れたのであつた。其の自覺心の對象となつたものは
 雪山である。印度先覺の聖者が幾千萬年此雪山に對
 して其瞑想を凝し得たる印度は其積集の極途に釋尊
 に至りて最高の實現となりて現れた。かくてその自
 覺心から慈悲の念を起して、爰に教として示された
 のが佛敎である。其教は覺者と不覺者との間には天
 地の隔があつたので、種々の方法を以て示された。
 即ち山へ入る隱遁者流の苦行者も不可ぬ。然し世間
 に出で醉生夢死する享樂者も不可ぬ。故に眞の本道
 はその中庸を得なければならぬといふのである。こ
 の思想から現れて來た文明が、即ち印度自然的文明
 である。西洋人に隨へば、西洋文明の起源は人間が

自然を征服して人間の領域を開拓せる文明であると
 して居る。希臘の文明は市から起つたが、印度の文
 明は森林生活を以て理想とした。即ち人間が自然と
 同化した結果として現はれたものである。西洋の文
 明は眼耳鼻舌身意の小欲小意志を積集したものであ
 るとするならば、其等の小欲、小意志を犠牲に供し
 て自己の生命を實現せんが爲めに自然の元素とな
 つて、宇宙の大生命、大自我に歸す所に印度の文明
 の特色がある。従つて一方生存競争の結果生じたる
 都會の文明であるが、印度のは生存競争を否認して
 現はれた村落の文明である。そこで印度文明は精神
 的文明と云ふ。之に對して西洋の自己實現は經驗的
 にせんとしたもので西洋文明は物質的文明である。
 ショペンハウエルが意志説を唱導して禁欲によつて
 初めて涅槃に達するを得と説いたのは、彼が印度文
 明を解して居たからである。
 上述の如く雪山の理想は佛陀の人格を導いて具

體的に示現せられたのである。この理想を説かんと
 する試は唯絶望に終るのみである。若しも且暮この
 山に對して理想を向上せしめたならば必ずや如何な
 る偉人になり得るかも知れぬ。然るに現今の印度人
 には斯かる崇嚴なる山の觀念がない。印度のシエー
 クスピアと呼ばれた詩聖カーリダーサの叙事詩「雲
 の使者」はゲーテ、シルレルをして賞讃せしめたが
 其の内には雪山を讃頌して蒼穹を測る尺度であると
 云つてゐる。斯くて印度人は世界の精神的文明の源
 泉となつたのであるが、周圍の事情は自から飽く迄
 で之を發展せしむることを許さず、諸方から物質的
 の壓迫を受けたが爲めに、終に國民は現今の様な疲
 弊の状態に陥り、獨特の文明は流れ流れて他の東洋
 諸國に入るに至つて、我日本は正しく印度の文明の
 全部を受け繼いで之を完成せしむる使命を帯びて居
 る。然も日本は西洋の文明を輸入すること茲に五十
 年、今や東西の兩文明は我島國に一大合流を爲しつ

つある。此兩文明を如何に支配すべきか、國民の覺
 悟を要すべきは實に此秋ではないか。



清水龍山

守屋貫教 中谷良英
鈴木一成 柳原久遠

共編

内容見本呈上

新修 略註 蓮聖人遺文集

再版 改訂

科段 御遺文百廿余編(脚註入)

御義口傳
御講聞書
妙行要文集
一日一訓
聖語字解

体裁 裝幀

巻頭挿入クリアート寫眞版七葉
四六版 縦六寸二分 横三寸五分
紙數 千百十四頁
特製 總皮 三方金
並製 總クロス 天金
函入最上美本
定價 特製 三圓八十錢
並製 二圓八十錢
送料 廿一錢

發行所

久遠閣

東京市日本橋區江戸橋二ノ六(明正ビル)

電話日本橋03一七番
番付口座東京七二八〇六番

法華經講話

(第二十八講)

小林一郎

妙法蓮華經方便品第二(其十二)

此より方便品の偈の續きであります。

久遠劫より來

涅槃の法を讚示して

生死の苦永く盡すと

我常は是の如く説きにき

(從久遠劫來 讚示涅槃法 生死苦永盡 我常如是説)

教を説くには、人間の本當の性質を本にして説かなければならぬ。「久遠劫」といふのは、勘定の出來ないやうな舊い遠い昔といふ意味であります。その遠い昔から以來、人間は世の中の苦しむとか悩みとかいふものを離れることが出來ずに毎日を送つ

て居る。「涅槃」といふことは滅といふことであります。が、その滅といふものにもいろいろな道がある。例へば利害損得を滅するのも其の一でせう。これが損だとか、これが得だとか、斯うやれば都合が好いとか、斯うやれば都合が悪いとか、さういふ事を一切離れて、人間の當に爲すべきことを爲し、人間の行はなければならぬ事を行ふといふことも一つの滅であります。普通の人は損が行けば何もやらない、儲かれば何でもやる。斯ういふやうに考へるのが普通であるが、よく考へて見れば損が行つても善い事もあるし、儲かつたつて悪い事もあるのだから、その利害損得を離れて人間の當然すべき事をしなければ

ばならぬ。斯ういふ風な考へが一通り出来ませればそれは一種の滅といふべきで、謂はゞ涅槃の初歩は利害損得を離れるといふことである。

ところがさういふやうに利害損得を離れてしまつて儲かつても宜し、損が行つても宜し、出世しても出世しなくてもどうでも宜い、斯ういふ風になつてしまふと、人生といふものに對して全く興味を感じないことになりませう。さういふ人ばかりになつては世の中はまるで滅茶々々です。儲かつても宜い、損しても宜い、勝つても宜い、負けても宜い、萬事どうでも宜い……斯うなれば、つまり生きて居つても宜い、生きて居なくても宜いといふことになるから、多くの人が斯う考へれば、人生といふものが全く無意味になる。斯ういふ考へ方は、要するに世間に構はず、自分だけ淨らに行ひ澄せばよいといふので、所謂獨善主義です。獨善といふのは自分さへ善ければよいといふ考へ方で、これは更に賞讃すべきものはぬといふやうな人が随分多いでせう。それは甚だ不人情な、甚だ誠意の無いことでありまして、人間は一緒に生きなければ生きて居られないといふことを忘れたものです。覺るといつても、決して自分獨りで覺りの開けるものではない。大勢の人のお蔭で毎日を送つて、大勢の人のお蔭で學問をして研究をして、さうして覺りを開くのでありますから、自分が覺るといふことに就ては幾多の人のお蔭を受けて居るのでありませう。大勢の人のお蔭を受けて覺つて、自分が獨りで覺つたやうな顔をして、他の人は苦しんで居つてもかまはないといふやうなことを考へることは、これは人間の道として甚だ間違つた話である。だから第二には此の獨善の心持を滅しなればならぬ。

それならば一切の人を救ふために力を盡したらそれで宜いかといふに、まだいけない。自分は救ふ、彼等は救はれるのだ。自分は教へる、彼等は教へら

ではない。世間の人がどんなに苦しんでも自分が安心ならばそれで宜い、世間の人があんなに惱んで居つても自分が覺つて居つたらそれで宜い。斯ういふ考への人が多くては世の中は善くならない。自分さへ善ければそれで宜いといふのだから、山の奥か何かに入つてしまつて、さうして松風の音でも聞いて麥飯でも食つて暢氣にやつて居れば宜い。若し多くの人がそんな心持になつてしまつたら人生は破滅です。これは利害損得にのみ囚はれて居る者よりは宜いけれども、此の獨り善くするといふ心持をモウ一つ離れなければならぬ。

佛教といふものが今まで世の中にあまり行はれないのも、一には佛教信者の中に此の獨善といふ思想に陥つた人が多かつたからでせう。信心をするとか言ふ人には往々にしてその弊害がある。自分が獨りお経を讀んで、自分が獨り本尊様にお辭儀をして居れば、それで宜いのだ。世間の人があんなつても構

れるのだと、斯ういふ風に考へて、自分といふものを世間の人よりも遙かに偉い者に思つて居るならばそれはまだいけないのです。斯ういふ心で居ると自分が教へても人が感謝しなければ腹が立つ。自分が教つても救はれる人が有難いと思はなければ嫌になる。それでは本當に救ふとか教へるとかといふことは出来ない譯です。だからそこをモウ一段超越して、人を救ひながら教つて居るといふことを誇らないやうに、人を教へて居ながら教へて居るといふことに得意を感じないやうになりまして、初めて本當に人を導き世を救ふといふ人に成れる譯であります。それは即ち差別の念を滅すること、自分は教つて居るけれども、教はれて居る人と救ふ自分と段が違ふといふやうな事は忘れてしまふ。自分は教へて居るけれども、教へられる人間よりは自分の方が上だといふやうな事は忘れてしまふ。彼も我も一緒になつて共に修行するのだ、共に學ぶのだ、共に佛の道に

向つて行くのだといふ心持になつて、自分と世間の
人との差別を無くしてしまふ。斯うなれば本物です。
ですから滅といふことは三段ある譯です。涅槃とい
ふことを差別を離れるといふ意味に解釋致しますけ
れども、其の中に三つの差別がある。先づ利害損得
の差別を離れる。次に獨り行ひ澄して居たいと思ふ
差別を離れる。それから第三には教ふと教はれる、
教へると教へられるといふことの差別を離れる。斯
うなつて行くと、これが本當の覺りの道に入つて行
ける譯であります。

涅槃の法といふのはそれを申します。涅槃の法に
は以上申しましたやうにいろ／＼な階段があります
が、その涅槃の法を世の中に奨めて、是非これを實
行するやうにご教へ導いて行く。さうすれば「生死
の苦永く盡す」といふ結果になる。生死といふのは
前にも申したやうに生きる死ぬといふことだけでは
い、人生のすべての差別を生死といふ言葉で表は

のであります。

舍利弗當に知るべし

佛道を志求する者

成く恭敬の心を以て

曾て諸佛に従ひて

我佛子等を見るに

無量千萬億

皆佛所に來至せり

方便所説の法を聞けり

(舍利弗當に知る 我見佛子等 志求佛道者 無量千

萬億 咸以恭敬心 皆來至佛所 曾從諸佛聞
方便所説法)

今此處に集つて佛の教へを聽聞して居る人々の様
子をよく觀ると、「佛道を志求する」といつて、何
とかして佛のやうな徳を具へて、多くの人を救ふ身
となることを望んで居るものが夥しく居る。それが
皆恭敬の心持を以て、佛様の教は有難い、佛様の教
はどうしても自分達が實行しなければならぬもので
あるといふ、眞面目な心持を以て佛の所に集つて來
て、さうして佛の教を聽くのである。而も此等の人
人が今になつて急に斯ういふ心持を起したのではな

して居るのであります。その人生の差別、人生の變
化に伴つて吾々にはいろ／＼な苦がある。その苦の
本をスツカリ覺りさへすれば、即ち「永く盡す」で
如何なる場合でも苦が再び起らぬやうになれる。金
が有つても宜し、無くても宜し、高い地位に居つて
も宜し、低い地位に居つても宜し、順境に居つても
宜し、逆境に居つても宜し、どんな所に居つても心
を惱まさないといふやうな境界になれるのである。
「我常は是の如く説きにき」佛様は初めからさうい
ふ心持で大勢の人間を教へ導いて行つたのである。
ところで人間をよく見ると、人間には馬鹿も利巧も
あるけれども、その心の奥のモット奥には決して現
實の生活には満足しないで完全を求めるといふ心持
即ち佛性といふものが皆あるのでありますから、此
の性質を確りと認めて、此の貴い性質をだん／＼と
伸ばして行くやうに教へ導くといふことが、佛様の
一代のお仕事である。その事をなほ續いていはれる

い。人間の生命といふものは現世の五十年や六十年
で終るものでもなければ、又始まるものでもない。
所謂無始の昔から無終の後まで續くものであつて、
遠い昔から吾々は生きて居つたので、又終りの無い
後の後まで生きて居るのだといふことを考へなければ
ならぬ。淺薄な考へを有つて居る人は此の身が自
分の全體だと思ふけれども、身が即ち自分なので
なく、此の身は自分が生きる爲の一つの道具に過ぎ
ないといふことを考へなければいけない。若しこの
身が自分であるならば、身が半分になつたら自分が
半分になる譯ですが、そんなことは決してない。お
互によく考へて見ると、生れた時は極く小さい身で
あつた。それがだん／＼大きくなつて、今は五尺か
六尺の身になつて居る。併し生れた時から自分は自
分で、大きくなつたら自分が變つたといふことは考
へられぬ。頭も大きくなり、手も大きくなり、足も
大きくなり腹も背中も皆大きくなるけれども、大き

くなつたからといつて自分が異つたものになりはしませぬ。生れた時の自己がやはり今の自己です。一年経つたら自分が殖えるといふ譯ではない。二十歳になつた時と、四十歳になつた時と比べて、四十になつた時に二倍の人間になる譯ではない。小林といふ人間は生れた時から小林であります、五十歳を過ぎた今でも小林であります。これから死ぬまでどれ程生きて居るかわかりませぬけれども、やはり私は私です。一年経つたからといつて私が殖える譯ではない。勿論身は變ります。生れた時には頭に毛が疎に無かつたのが、だん／＼年頃になると頭の毛が眞黒に生えて来て、私でも二十、三十の時には随分頭の毛が多かつたのですが、この頃になつてだんだん禿げて、眞ん中の艶がよくなくなつて来た。その中毛が皆無くなるのでせう。毛が無くなつても私は無くなりはない。私は元の私です。若し自分が自分であるならば、身が變るたびに自分が變る筈ではありま

せぬか。所が自分といふものは始終一貫して變りはないのであります。さういふことを考へなければならぬ。

そこで此の身といふものは吾々の生きる爲の道具なのだから、役に立つ間は使つて宜しい。役に立たなくなつたら捨て、よく宜しい。それは身の一部分に就て考へて見ればよくわかります。例へば爪といふものがある、爪があるから物を掴むには都合が好いでせう。けれどもこの爪が伸びて邪魔になれば鉄で挟んで棄てるのです。身の一部分であつた時には、た。けれどもこれが餘り伸びると鉄で挟んで棄てる、棄て、しまへばこれは身の一部分ではない。鉄で爪を挟んで棄て、床の上に落ちた爪を、これは大事なナンと言つて保存して居る人は恐らく無いでせう。身の一部分であつた時には大事です、人に依ると、これを磨いたり、紅を差したり、いろ／＼して居る

けれども、伸びて棄て、しまへばそれ切りです。頭の髪でもさうです、自分の身の一部分であつた時にはその髪を非常に大事にする、殊に御婦人の方はさうですが男でもさうです。人によるとコスメチックを附けたり、鏡を掛けたり、蒸したり、其他いろいろな事をして、二時間も掛つて頭をコテ／＼拵へて居る。そんなに頭の髪が大事だと思ふけれども、これが伸びて床屋へ行つて刈つて棄てれば、その床に落ちた髪の毛を「これはこの間までコスメチックを附けた髪の毛だから記念の爲に保存して置かう……」そんな人はありはしない。身に附いて居る間だけ自分の一部分なので、切つて棄てればまるで無關係です。

爪を棄てる人が爪に未練は無い、髪の毛を棄てる人がその剪つて棄てた髪の毛に未練は無いのですからそれよりモット進んで言へばこの身全體でも役に立つ時は自分の身だが、多くの部分が損はれて役に立

たなくなれば、この身を棄て、しまつても少しも未練のある筈はないではありませんか。身全體といつても、爪や髪の毛の少し複雑になつたものにすぎぬので、大した違ひはありはしない。爪を平気で棄てる人、髪の毛を平気で棄てる人ならば、身全體が役に立たなくなつた時に、バツと棄て、行つても何ともない筈です。但し爪とか髪の毛とかといふものは吾が身の一部分に過ぎない、身といふものは全體だけれども、一部分を棄てられる人ならば、考へやう一つで全體だつて捨てられる筈です。それを爪を剪るのは平氣だし、頭の毛を剪るのは平氣だが、死んで行くのは残念だといふやうなことは、本當を言へば理窟に合はないのです。そこは要するに心の持ち方一つです。けれども生き残つた人が、今まで見た顔が見られなくなる、今まで會つた人に會へなくなるからといつて、これを悲しみ悼むといふことは、これは人間の情でありますからまことに尤もでありま

す。人間といふものはたゞ理窟だけで生きて居る譯ではありませぬから、今まで一緒に居つた人が居なくなれば淋しい、今まで仲好くした人がモウ永久に來ないといふことになれば悲しい。これは人間の情でありますから、それまでを止めることは佛様も決して仰しやらない。けれども自身としては、爪を剪ることも、髪を剪ることも出来る人間だから、身を捨て、少しも惜くないといふ、それだけの覺悟を平生から有たなければならぬ筈です。その覺悟が無いから皆ビク／＼して居る。どうしてもこれは永遠の事を考へなければいけない。此の身はなくなつても、此の心は永くなくなりはないのである。斯ういふ身を持つて居ることは人間が此處で生きるといふ事の一つの形に過ぎないのであるから、この形を離れても自分の生命といふものは朽ちない滅びないものであるといふ、この眞の自己を確かりと捉へることが最も大事なことであります。そこを捉へる

のが本當の滅といふことを知ることであります。それで自分達の身は死んでも心は死なぬと思ふなら、今日の一日を宜い加減に思ふかといふと決してさうではないのです。人間の生命といふものはズツト續いて居る、遠い昔から際限の無い後の世まで續きます、その續いて行く中の眞ん中が現世です。現世に生れて來る前に吾々は生きて居つた、現世の生命を終つても其の後まで生きて居る。その過去の世から未來の世まで中間に於て現世といふものがあるのですから、現世は五十年か六十年かの短い生命でありますけれども、兎に角これは永い生命の一部分であることは間違ひない。だからこれは無駄にしてはならない。譬へば十丈か二十丈の大きな竹が地面から生えて居る。その竹の一節々々は二尺か三尺であるけれども、その一節が皆長い竹の一部分であることは間違ひがない。その二尺か三尺の一節の間を蟲が喰つて腐つてしまへば、その竹は折れなければ

ばならぬ。それと同じことです。吾々の生命は永遠のものでありませうけれども、その永遠の生命の眞ん中で、過去の生命に續き、未來の生命に續く、それが現世の生命ですから、この現世の生命を無駄にするならば、これから後の生命も眞に意味の有るやうには送れないといふことは考へなければならぬ。それで私共は今日の一日を大切にするといふことは、今日の一日が永遠の生命の一部分であると思ふから、今日の一日を無駄にすることが出来ないのです。今日をいゝ加減にし、明日をいゝ加減にし、明日をいゝ加減にして、出鱈目の一生涯を送つて死んだならば、後の生命もどうも碌なものではないでせう。だから永遠の事を考へるならば、その永遠の生命の本をつくるのが、今日の一日の生き方であるといふことを考へて今日の一日を決して無駄にしてはならない。斯ういふ心持が起る譯であります。だ

から宗教を信じて今日の生活を宜い加減にするといふやうな人があるならば、その人は本當に宗教を信じた人とは言へない。永く續くと思へば思ふほど、その永く續く一部分である今日の一日を價値のあるやうにしなければならぬ、斯ういふ心持が起る筈であります。下手にそこを考へるといけない、「ナーニ現世は假の世だから、後の世を待んで現世はいゝ加減にして置け、その内には一生涯経つてしまふ……」といふやうなことを言ふ人もあるけれども、これは飛んでもない話で、今日の一日を無駄にして、この一生涯を無駄にして、いゝ加減にして生きて居る人が、後の世になつて極樂へ行つて蓮の華の上で胡坐をかいて樂に暮せるナンといふことを考へるならば、そんな極樂といふものは怠け者の屯集所見たやうなもので、少しも善い所でありはしない。後の世の永遠の生命を考へるならば、現世に於けるこの一年、この一月、この一日、この一時間を最も緊張

した気分で確かりと過さなければならぬといふこと
になる筈であります。極樂淨土の美しい有様を力説
したる無量壽經に、現世の善行が細々と説いてある
のは大に味ふべき所であります。實際吾々は永遠を
考へることに依つて、その永遠の生命の一部分であ
る今日の生命を無駄にしないといふ確かりした心持
が出来なければならぬ筈です。

そこが佛の本當の御趣意でありますので、曾て前
の世から佛様の教を聞いたであらう其の人々が、現
世に至つて又釋迦牟尼佛の教を聞いて、現世で教を
聞いたその結果がまた後の世にまで永く傳はるであ
らうと、斯ういふことを仰しやつてゐる。此等の人
人は曾て諸佛に従つて種々なる方便の説を聞いたの
である。過去の諸佛は其の人々の力に應じて、教
をお説きになつた。その教といふものを聽いて生れ
更つて來ても、前の世の一切の修行は決して無駄に
はならない。その教を聽いた人々が再び現世に生れ

の教を手懸りとして次第に深い方の教にまで入らせ
ようと思つて説くのである。結局一切の人をして、
佛と少しも異はないやうな智慧を具へさせたいとい
ふ心持を以て説くのである。「今正しく是れ其の時
なり」自分は今まで四十年以上教を説いて來たから
今度こそは自分の本心をスツカリ打明けて衆に話し
たい。お前達皆能く修行して皆佛と同じものに成つ
て呉れ。今までの所では賢い人もあり、愚かな人も
あり、善い人もあり、悪い人もあるけれども、結局
努力さへ惜まなければ佛と同じに成れるのだから、
信心して修行して、さうして佛と同じものになつて
呉れといふことを、今こゝで打明けていはれたので
ある。

これは「理一」と申しまして、佛はいろ／＼に教
へるけれども、その教へる所の理は結局一つに歸著
するのだといふことを明言されたのであります。人
間にもいろ／＼な人間があるけれども、終には皆同

て來て自分の教を聽くのだ。だから今迄自分の方便
の教を聞いても、その方便の教を手懸りとして、結
局眞實の教に入つて行くにちがひ無い。斯ういふこ
とを明言されるのであります。こゝ迄の所は所謂「人
一」と申しまして、人々の境界が異り智解が異つて
も、結局その人々は同じ所に歸著しなければならぬ
といふことを教へられるのであります。

我即ち是の念を作さく 如來の出たる所以は
佛慧を説かんが爲の故 なり
今正しく是れ其の時な
りと

(我即作是念一 如來所以出— 爲説佛慧故 今
正是其時)
それから佛様が世に出て教を説くに當つては、い
ろ／＼な教を説くけれども、結局は凡ての人が佛と
同じやうな智慧を具へるやうに教へ導くといふこと
が其の本當の目的である。相手がつまらない人であ
れば、先づ低い方の教を説くけれども、その低い方

じに成れる。教にも淺い教、深い教といろ／＼ある
けれども、その結著する所の理は一つだといふこと
を説かれたのであります。

舍利弗當に知るべし 鈍根小智の人
著相憍慢の者は 是の法を信すること能
はず

今我喜びて畏無し 諸の菩薩の中に於て
正直に方便を捨て 但だ無上道を説く

(舍利弗當に知る 鈍根小智人 著相憍慢者 不能信
是法— 今我喜無畏 於諸菩薩中— 正直捨方便—
但説無上道—)

「鈍根小智の人」といふのは、眼前の事ばかりい
つも考へて、未來の事などは考へない人です。機根
が鈍くて小さい智慧ばかりの人といふのですが、小
さい智慧といふのは眼前の事ばかり考へることで
す。人間が眼前の事ばかり考へて居たらこんな馬鹿
なことはありはしない。今日雨が降るからといつて

雨の降ることばかり考へて、晴れる時のことを考へない。今寒いからといつて寒いことばかり考へて、暑くなる時のことを考へないとしたら、斯んなつまらない人はない。ところがウツカリすると吾々の毎日の事が皆さうなる。電燈が停電のためにヒヨツと消える、それは消えても亦點く時がある。それを「アア、電燈が消えたナ、モウこれは駄目だ」と思つて寝てしまふなら、是れはまことにつまらない人でせう。消えたら暫く待つて、明るくなつた時に又仕事をするのが賢い人です。三分か五分で點くの、モウ電燈はいつまでも點かないものだと思つて寝てしまふ人は怠け者です。電車がチョット停つたといつても、待つて居るのは三分か五分です。それを「モウ電車が停つたから駄目だ」と思つて歩き出せば、歩いて居る間に後から電車が追掛けて来て、ツーツと追ひ抜いてしまふ、よくそんな事があります。だから眼前の事はかり考へてはいけません。吾々

はいつでも眼前の事に囚はれてはいけません。眼前にはいろ／＼な變化があるけれども、如何に變化があつても永久のものは永久のものだから、人生にどんな變化があつてもその變化に囚はれないで、永く滅びないものをいつも考へて居なければならぬ。斯ういふ所を誰でも一つ確かりと捉へて居なければならぬ、それがわからない人が鈍根小智の人であります。

それから「著相橋慢の者」著相といふのは自分のよいと思ふ所に執着すること。自分が少しばかり本を讀んだり、人の説を聞いたたりして、多少物事が分つて來るとその自分の心に映つた所に執着してしまつて、モウこれで澤山だと思ふ。それが著相橋慢の人であります。世間の人には此の例が非常に多い。本を一冊讀むと「モウわかつた」と思ふ。本當にわかつては居ないのだけれども、少しばかりわかると「ウン、これで澤山だ」といふ。人の話を二度か三

度聴くと、「ア、もう俺は覺つてしまつた」といふが、ナニニ覺つても何も居はしない。少しばかりわかつたといつて心に誇りを感じて、モウこれ以上の修養をする必要がないといふ風に思ふ人、それが著相橋慢の人であります。さういふ人は「是の法を信すること能はず」佛様の本當の教を信じていつまでも修養を續け、いつまでも信心を續けるといふことは出來ない。

何時までもさういふやうなつまらない人間ばかりでは一向いけないのだけれども、お釋迦様は自分も四十何年の間大勢の人を教へて來て、モウ大分多くの人が一生懸命になつて來たから、今日に於ては「今我喜びて畏無し」モウ少しも心配は要らない。それで「諸の菩薩の中に於て」と仰せられた。お前達の中には今低い教を信じて居る者もあるけれども、結局は皆菩薩の行ひをして世の爲、人の爲に力を盡す者に成れると思ふと仰せられた。「諸の菩薩の中に

於て」といふのは至つて短い言葉ですが、この言葉を本當にお互ひがよく考へなければなりません。たつた五字ですけれども、「諸の菩薩の中に於て」とお釋迦様が吾々に對して仰つやつた。お前達の中には馬鹿もあれば利巧もあり、今のところでは低い方の教で満足して居る者もあれば、高い方の教を求むる者もあるけれども、結局は皆低い方で満足しなくなる。結局は自分さへ宜ければよいといふやうな心持では到底満足しなくなる。世の爲、人の爲に力を盡して、自分一人の骨折りに依つて多くの人が幸福になるといふやうにならなければ、お前達の心に本當の満足は無いのである。だから佛は多くの人を皆菩薩と思ふ。今日は菩薩といふやうな徳を具へて居なくても、だん／＼修行して行けば、そこまで到達しなければ満足しないのだから、佛様は此處に居る人を皆菩薩だと思ふと仰せられるのです。それは非常に尊いことで、吾々も皆さう思はなければいけ

ない。佛様の教を受ける人は皆菩薩にならなければいけない。佛様は「お前達の中に程度の相違はあつても、後には皆菩薩の行を積んで、皆世の爲、人の爲に力を盡すやうに成れると思ふ。お前達を信する。お前達はキツトさうなるだらう」と斯う仰しやる。信せられて居ながら、自分達が怠けてごまかして、宜い加減な事をして居つたのでは、この佛の恩に報ゆることが出来ない譯であります。

であるから「諸の菩薩の中に於て」といふこの言葉は實に尊い言葉です。私共は斯ういふ言葉を聞いた時にまことに恥かしい。諸の菩薩といふ時に吾々もその中に入れて下さつたのだが、サアどうだらう。本當の菩薩の行が出来るかナと思つた時に、如何にも恥かしく思ふ。所謂慚愧の心持が起る。佛様から御覧になれば皆菩薩に成れるのだと思召して、吾々をまでも諸の菩薩と仰しやつて居る。吾々も此の有難い御言葉に反かないやうに自分の行ひを勵んで行

かなければならぬ。斯ういふ心持が起きなければならぬのであります。

諸の菩薩の中に於て佛は教を説くのである。さうして「正直に方便を捨て」今まではいろ／＼方便の教といつて、相手に應じて低い教や浅い教を説いて来たが、モウ今日はその方便の浅薄な教を捨て、さうして「但だ無上道を説く」とある。無上道といふのは佛に成る道で、どういふ風な行ひを積んで行つたならば佛の境界に到達し得られるかといふ、その最後の一番高いところの教を説くのであると、斯う仰しやつた。

この所は「教一」といつて、佛の教の歸着する所は一つだ、人間の行ひの歸着點は一つしかない。絶対の真理といふものは二種あるものではない、唯だそれは入つて行く道には浅いも深いもある。二階へ行く梯子段の十段も十一段もあれば、一段二段三段と歩いて行かなければならぬけれども、結局は二階

へ行くのである。だから人間の修行の仕方はいろいろあるけれども、結局は絶対の理を信じて、佛と同じやうな境界に到達しようといふことを理想としなければならぬ。佛の説法の趣意はこれなので、是れが教一といふことであります。

菩薩是の法を聞きて

疑網皆已に除く
悉く亦當に作佛すべし

千二百の羅漢も

疑網皆已に除く
悉く亦當に作佛すべし

(菩薩問是法、疑網皆已除、千二百羅漢、悉亦當作佛)

菩薩といふのは自分一人助かつて宜いと思ふ人ではない。自分が助かるならば人も助けたい、自分が苦を離れたならば、世の中の人の苦も除いてやりたといふやうな心持の人であります。さういふ心持の人が佛の教を聞いてだん／＼修行して行くこと、疑網皆已に除く、今までの疑ひといふものがスツカリ無くなり、自分も終には佛になれるといふ確信が出来ると。さうして「千二百の羅漢」これは佛の小

乗の低い方の教を聞いて、人はどうでも自分さへ淨らかな行ひをすれば宜いと思つて居つた人々であるけれども、さういふ人々でも世の爲、人の爲に力を盡すのが尊いといふことを能く聞きますれば、「悉く亦當に作佛すべし」といつて、人の爲に力を盡すことを續けて行つて結局佛と同じものにならうといふ志を起すのである。但しそれには順序がある。前にも幾度も申したやうに、道も教も辨へぬ一番低い人間は「執著」して居る。金が欲しい、掴んだ金は放さない。地位が欲しい、地位を得たらば決して人には譲らない。身分が欲しい、よい身分になつたら人には頭を下げぬ。ガリ／＼でいつも自分の事ばかり考へて居る。それが即ち執著です、それが凡夫の境界であります。それからその上になれば「能捨」といつて何でも捨てられる人、金は大事だと思ふけれども、ナニニ金ばかり欲しいわけではない、貧乏したつてその時はその時だと思ふ。高い地位は宜い

けれども、強ひて高い地位にこびりついては居ない、捨つべき機会が来れば捨て、もかまはない。無論金のあることは宜いが、無くてもガツカリしない。身分の高いことは結構だが、低くなつてもガツカリしない。美味い物を食べて居るのは結構だが、不味い物を食はなくては居られないといふ時が来たら不味い物でも我慢する。斯ういふのが所謂能捨の人です。それは執著するより餘程優つた人です。

そこで能捨の人、即ち必ずしも執著しない人となりません。それから更に進みまして能施の人となりません。自分を節約しても人に施さう、自分で私せずして何でも他の人に分けてやらう、一人で幸福になつて居つては濟まない、一人で繁昌して居つては濟まない。斯ういふ心になつて行く。それで先づ斯ういふ順序を通るのであります。

一、執著 二、能捨

三、能施
初めは「執著」で、人はどうでも自分さへ宜ければよいと思ふ。その次は「能捨」で、ごつちでも宜いと思ふ。次は「能施」で、他の人も幸福にしてやらう、自分は多少不自由しても分けてやらうといふ考へになつて行く、この三つの道を通るのであります。これは佛教に限りませぬ、世間の普通の道を行つていつてもこの通りです。初めからさう一足飛んでは行かないから、だん／＼にさういふ風に進んで行くのであります。

それで初めは先づ世の中の欲を離れる位の心持でありますけれども、だん／＼と深く佛の教を聞いて見ますと、自分の欲に囚はれて居るのは勿論つまらないが、自分の欲を離れるといふ心持になると唯だ欲を離れるだけではない、自分の力の許す限りに於て他の人の幸福を増してやりたいといふことになつて行く。そこで「千二百の羅漢、悉く亦當に作佛すべし」

と「いふので羅漢といふのは所謂能捨の人であります。執著しない人でありますけれども、執著しない人が更に進むと人の爲に力を盡さう、一切の人を救はうといふ心持になるから、捨てるといふ心持がやがて與へようといふ心持になりまして、さうして終には「作佛すべし」といつて佛の境界にまで到達が出来る。斯ういふことであります。

是れまでが所謂「行一」でありまして、佛は一切の人を皆佛の境界に到達せしめようと思つて教を説かるといふのであるから、其の御本意が分れば、誰も皆修行を積んで佛の境界へ進んで行くことが出来るといふことを説かれたのであります。

三世の諸佛の 説法の儀式の如く 我も今亦是の如く 無分別の法を説く

(如三世諸佛 説法之儀式 我今亦如是 説無分別法)

三世といふのは過去、現在、未來、即ちいつの時

代でも佛様が世の中で教をお説きになるのには皆定まつたる順序がある。釋尊も亦その通りで、「我も今亦是の如く無分別の法を説く」とある。無分別といふことは、文字通りに解釋すれば無差別といふことです。無差別といふことは、なんでもかでも同じにする事かといふと決してさうではない。さういふ風に彼も此も皆同じだと考へるといふことは淺薄な考へ方です。無差別の中に差別を求めなければいけない、それが大事なことです。皆様が此處に大勢からつしやるが、皆人間だから皆人間の形を具へて居る。顔の上の方に眼があつて、真ん中に鼻があつて、下に口がある。それは同じだが皆同じ顔ではありません。皆何處か異ふ。また異つて居るから甲乙の區別がつくのです。異ふといふことも一面であり、異はないといふことも一面であります。上の方に眼があつて、真ん中に鼻があつて、下に口があるといふことは異ひは致しませぬ。けれども、その眼つき鼻つき

口つき顔つきは皆異ふのです。皆それ／＼に異ふといふことも眞實なる人生の事實であります。併しなから異ふといつても、眼が顎にくつ附いて居る人もなければ、口が顎にくつ附いて居る人も無いから、そこは皆異はない。異はないといふことも人生の一つの事實であります。そこで異ふ中に異はないものを求めて行く、それが無差別といふことです。即ち差別の中に差別を超越したものを求めて行くといふこと、それが無差別といふことです。たゞ何でも異はない／＼で一緒にしてしまふことではない。どうも此の頃はさういふ癖があつていけない。なんでも同じだと言ふが決して同じではない。例へば松の木を比べても、お濠の側に生えて居る松の木と、鉢植の松の木ではその全體の木の大きさが異ふ、枝振りが異ふ、葉の大きさが異ふけれども、松の木であることは異ひはしませぬ。だから同じ松の木であるといふこと、それが平等。併しながらその

人間として平等だとのみ考へて、智慧の有る者も無い者もまるで一緒にして、無茶苦茶にするといふならば、それは悪平等といふものです。悪差別は世の中に累ひします。悪平等は世の中を破壊します。これはどつちに囚はれてもいけない。だから眞の平等といふのは、差別のある世の中を能く達観して、その中に人間として共通な所を確かり捉へることです。差別を離れずして而も平等なものを確かり捉へるといふ心持で行きますのが、それが本當の無分別の法といふことです。これは私が勝手に説明するのではない。傳教大師がその事を能く説明して居ります。なんでも同じだ／＼といふ方ばかり考へるのは悪平等だ、なんでも異ふ／＼といつて、自分の都合の好い事ばかり考へて居るものは悪差別で、共に佛意に合はぬと言つて居ります。この所はお互ひに反省しまして、本當の中正なる間違はない道を守つて行かなければならぬのであります。先づ大體斯うい

形その姿は皆異ふ、そこは差別です。差別の中に無差別のものを求めて行くといふこと、それが無分別の法といふことです。ただなんでも一つにしてしまふといふ事ではありませぬ。

そこは確かり考へないといけない。何でも同じではない、皆異ふのです。その異ふことを無視する譯に行きませぬ。併し異ふといつても、その異つたもの／＼の中に共通なものが有り、變らない所があるのでありますから、その變らない所を求めて行かなければいけない。若しこの差別の方面ばかりを考へて、總ての人間の共通な性質をまるでかまはないとなれば、それは悪差別であります。「俺は金がある、貧乏人は皆馬鹿だぞ」「俺は身分が高い、身分の低い奴は皆駄目だぞ」「自分は物を知つて居る、馬鹿な奴は相手にならぬ」といふやうに、自分の立場ばかりを固執して、他の立場にある者をまるで相手にしないならば、それは悪差別であります。といつて又

ふやうに考へて讀んで見ますと、此の所の文章はよく讀めるのであります。

諸佛世に興出したまふこと

懸遠にして値遇すること難し

と難し

正使世に出たまふとも是の法を説きたまふこと復た難し

と復た難し

無量無數劫にも是の法を聞くこと亦難し

(諸佛興出せし懸遠値遇難 正使出于世 説是法復難 無量無數劫 聞是法亦難)

佛様は始終世間に出て下されば宜しいけれども、始終出て來られる譯ではない。佛のなくなつた後に生れた者は佛の時代とは非常に遠く距つて居つて、なか／＼値ひたてまつることは出來ないのである。又佛様が世にお出になつたとしても「是の法を説きたまふこと難し」で、此の法華經のやうに佛のお心持をその儘に打明けた事を説かれるといふことは、なか／＼容易に出來難いのである。又數限り無い歳

月の間に於て『是の法を聞くこと亦難し』で、佛の眞實を聞くといふことは非常に難しいことである。これはお經に書いてあるとたつた五字か十字ですけれども、私共は本當にさう思ひます。實に『是の法を聞くこと難し』であります。なか／＼佛の教を聞いてそれを信するやうな機運が熟するといふことは難しいのです。人間が皆惡者ではありませぬけれども、どうかすると佛の教などを聞く機会が無くて一生涯を通じてしまふ人も随分あるのです。佛の教を聞いて之れを信するやうになるといふことは尙に善き縁を得た人でありまして、なか／＼さういふことは難しいのです。

自分の一身の事など申上げて恐縮でありますけれども、私の母親は法華の家でありました。私の伯母といふのが母親の姉ですが、やはり法華の家で、赤坂の圓通寺といふお寺の檀家でありました。私は七つ八つの頃からよく伯母に伴れられて圓通寺に参詣

とか従容録とかいふものを讀んで見ると、それは面白い。隻手の聲を聞けナンといふ事があつて何だか面白い。兩方の手を合せなければ音がしないのに、隻手の聲を聞けといふ、何だかチョット變つて居るから面白いといふので、禪宗の本などは随分面白がつて讀んだ。けれどもそれは文學として面白く讀んだだけであつて、それを信じようといふ氣分にはならなかつた。

それから私は高等學校の學生になつた時に獨逸語を習ひ始めた。お恥かしい話ですが、自分の家が貧乏だからあまり獨逸語の本など澤山買へません。それで本郷の南江堂といふ本屋に行つて、獨逸の本で一番分量が多くて一番廣い本はないかと言つて聞いた。さうしたら出して呉れたのが獨逸語で書いてある耶蘇教の聖書です。これを七十錢で買つた。こんなに厚くて七十錢だといふ。これが一番中味が多くて一番安い。それは結構だといふので、獨逸語の聖

をして日蓮聖人のお像の前でお辭儀をさせられたものです。所が私には日蓮聖人がなだか、法華がなだか知りはしない。伯母さんに伴れられてお寺へ行つても少しも善いことはない、たゞ歸り掛けに四谷の通りでお汁粉を食べさせて呉れる、其のお汁粉が食べたから附いて行つた。唯だそれだけの話です。私は幾度も佛様の前でお辭儀をさせられたのだが、その佛様どの縁は其の後絶れてしまつた。歸り掛けにお汁粉を食べた時は喜んでけれども、その後伯母さんの所で世話にならなくなつたらそれでお終ひで、私は學校を卒業するまで佛教を信するといふ心持は少しも起りはしなかつた。尤も私は年の若い時に漢學を習ひました。チョット病氣が十年以上も續いたものですから、定つた學校に入る事が出来ませぬので、その間に漢學を習つた。漢學を習つて居る間に、漢文で書いたものが面白くなつて來たから、佛教に關係したのも多少讀みました。碧巖錄

書を買つて讀んだ。讀んだが信仰を起す氣にはなれなかつた。信仰に縁はありながら而も信心を起す氣になりませぬでした。そんなやうに自分の過去を考へて見ると、信を起す機會は幾らもあつたのですが、併し信心しないでそこを通り過ぎてしまつたのであります。所がどうした縁か、大崎にあります日蓮宗の大學に西洋哲學講義をすることを頼まれて参りまして、その時分にも信仰などはありませぬでしたけれども、そこへ行つて居る内に日蓮聖人の遺文を讀んだり、その内に法華經を讀んだりしていつの間にか佛の大乗の教を信するやうになつたのでありますけれども、私は何時からさういふ事を信じたか、いづつさういふ縁を得たか、自分では知らないが、いつの間にか得た。法華經をはじめて讀んだ時からモウ三十年になります。是れは不思議な事です。幾度も佛の道に近づいたり、幾度も宗教に近づき場合があつたけれども、その時はスツと通りすぎ

てしまつて、少しも信仰の事など考へなかつた。でありますからヒヨツとしたならば、信仰といふことは知らないでその儘通つてしまつたかも知れないのであります。又何かの縁に依つて今でも洵に不束な者ではあるが、聊かなりとも佛の教を信するやうになつたといふことは、實にこれは不思議なことだと思ふ。實に人間が信に入るべき縁を得るといふことは容易なことではないのであります。私自分を考へてもさう思ひます、どうして斯ういふ縁を得たか、どうして斯ういふ道が開かれたかといふことは、自分ながらも不思議に思はれる。洵に有難いことである、何かの特別な恩恵であらうと思ふのであります。それで多くの世の中の人は折角正しい心持を有つて居ながら、折角確かりした理想を有つて居ながら、縁無くして佛の教に入ることが出来ないで、自分の心の迷ひを根柢から取除くことが出来ないで、何か欲しい欲しいと思ひながら、それが何であるか分から

ず、欲しいだけだけで一生を終る人も随分あるのであります。洵にこれは悼ましいことでもあります。それで「是の法を説きたまふこと復た難し、無量無数劫にも是の法を聞くこと亦難し」といふこの短い言葉が、私共には痛切に感ぜられる。斯ういふ教を聞くことはなかなか難しいのです。何でもない事のやうだけれども、縁が無いとナカ／＼斯ういふ教を聞いて之を吾が心の中に取入れるといふことは難しい。だからこの縁を無駄にしないやうにするといふことが、お互ひに取つては非常に大事なことだと思ひます。随分世の中に心も正しく行ひも正しい人でありながら、佛の教も知らず、神の道も辨へずして、折角正しい心持を有ちながら、その正しい心持を空しく一人で守つて大に發展させることもなく一生を終るといふ人も多いことでもあります。それに比べれば、私共は邪まな心持を有つて居る人間だけれども、縁有つて佛の教を學んで、お經の一偈一句でも習ふ

ことが出来たといふことは、ナカ／＼容易ならぬ貴い縁でありますから、この縁を空しくしないで、自分も確かりとした信仰に入るやうに、又他の人をも同じ信仰に導くやうに力を盡したいものだと思ひます。

徳川家康公の八男で、紀州藩の初めを開いた頼宣といふ人は、大阪の夏の陣に十四歳ではじめて從軍をして、大いに初陣の手柄を顯はさうと思つて居つたところが、お前の方の陣は後へ廻れど命令されたので、非常に残念がつて、折角今日は初陣の手柄を立てようと思つたのに、手柄を立てられなくなつたと言つて齒を噛んで口惜しがつた。さうして井伊直孝が其の一方の指圖をして居るといふので、直孝の陣所へ行つて「自分は今日の初陣に大いに手柄を立てようと思つて、手具腰引いて待つて居つたのに、自分の陣は後廻しだと言はれたので手柄を立てられなくなつた。貴様はひどい奴だ、どうして自分を後

陣へ廻したのか」と言つて談判をした。直孝は辭かに「まあそんなに逆上しないであらうしやい、あなたはまだお年が若いのですから、これから後に、幾らでも手柄を立てる機会があるでせう。そんなに一途に考へないでも宜いぢやありませんか」と言つて宥めた。さうすると頼宣は「馬鹿なことを言ふな、これから後に假令歳月はいくら運つて來ても、自分に十四歳の夏といふ時が二度と來ると思ふか」と言つたといふ有名な話があります。全くその通りで、十四歳の夏は二度と來ない。人間の一生涯がどれほど永からうとも、今日の此の日といふ日は一度過ぎたならばモウ再び來ないのです。これは實に大事な事です。今日の此の日は再び來ないのでありますから、今日の此の日に自分が信仰を決定するならば、此の日から後の生命が永久に救はれる。今日の此の日を無駄にすれば、再び機會が來るだらうと思つても或は來ないかも知れぬ。この日を無駄にして

はならない。今日の此の日は二度は来ませぬから、これを能く考へなければいけない。

永遠の生命でありませぬけれども、其の永遠の生命の中に於ての今日の此の日は二度は来ませぬ。だから今日の此の日に於て自分の信仰を決定することを誤つたならば、再びその機会が来るか来ないかわからぬ。それ故に私共の話などは洵につまらぬ話でありませうけれども、本を讀んでも或は人の話を聞いても、成程と思つたその日は二度は来ないので。だからその成程と思つた時に、自分の信仰を確かると決定しないといけない。その日を逸してしまつて他の日に……などと思ふと、他の日には又他の刺戟が来て、さういふ心持は再び起つて来ないかも知れない。だから成程と思つたその日に、自分の信仰を確かると固めなければいけない。有難いと思つたその日に、自分の向ふ所を決定しなければならぬ。その日は二度とは来ませぬ。その時刻は二度とは来

ませぬ。その二度とは来ないその時に、自分の一生涯の方針を定めなければならぬ。それが「是の法を聞くこと亦難し」です。さう矢鱈に正しい教を聞く機会が来るものではない。だからさういふ機会が来たならば、その機会を無駄にしないで、自分の將來を決定するといふやうにしなければならぬ譯であります。

能く是の法を聴く者
斯の人亦復た難し
一切皆愛樂し
譬へば優曇華の
天人の希有とする所
にして
時々乃し一たび出る
が如し

(能聴是法者 斯人亦復難 譬如優曇華 一切皆愛樂 天人所希有 一時乃一出)

その貴い教を聴いて一生涯信じて居る人がどれほどあるかといふと、さういふ人も容易にはない。譬へば優曇華といふ花は非常に美しい花ださうです。一切の人が皆愛好して、天上界のものも人間界のものも、極めて稀に咲く花だとして皆珍しがつて居るけれども、それは矢鱈に咲きはしない、咲くべき時が来た時に初めて一度咲く。それと同じことで、吾が佛の教を學んで、その佛の教を有難いと思ふやうな機会といふものはさう矢鱈に来るものではない。だから假にも有難いと思つたならば、その機会を無駄にしないで、その時から確かりと深い教に入らなければならぬ。「又そのうちに……」などと思つたら、世の中は無常だから自分の身の上がいつ變るかかわからない、世の中がどんなに變化するかかわらない。善き機会を無駄にしないやうにするといいことが最も大事であります。

(聞け法歡喜讚 乃至發一言 則爲已供養 一切三世佛 是人甚希有 過於優曇華)

その佛の教を聞いて心に歡喜を感じて、たつた一言でも佛様は有難いな、佛の教は尊いナといふ言葉を出しますならば、その一言に依つて、それは過去現在、未來に亘つて多くの佛をお讚め申すことになる。吾々はお釋迦様を有難いと思ふが、そのお釋迦様のお覺りになつた事と、三世に亘り十方に亘つて數限り無い佛様が出て居らつしやつても、其等の佛様のお覺りになつた所と少しも異ひはしない。絶對の眞理といふものは二種は無い、眞實の事といふものは一種しかない、二種あつたら本當ではない。だからお釋迦様のお覺りになつた所は、即ち有らゆる佛様のお覺りになつた所に違ひない。若しそれが二種も三種もあれば何れも眞ものではない。若し二種も三種もあればその上に更に又一番上のものがなければ

法を聞きて歡喜し讚めて 乃至一言をも發せば 則ち爲れ已に 一切三世の佛を供養 するなり

是の人甚だ希有なること 優曇華に過ぎたり

ればならぬ。それでありますから佛が覺られた事はどの佛の覺られた事でも、いつの世の佛の覺られた事でも同じことであります。それ故に私共がお釋迦様の教を學んで、其のお遺しになつた法を信するといふことは、お釋迦様一人を信するのではない、有らゆる佛様を信することであります。有らゆる佛に歸依することであります。それを信仰の絶対性と申します。これは學問とは違ふ。學問ならば或は物理學を習ふとか、天文學を習ふとかいふ時には、いろいろな本を集めて、この本は此處の所が良い、この本はこゝの所が良いといふやうに、良い所を探つて悪い所を捨てられる。けれども信仰はさう行かない。一たび信じた以上は、身の力も心の力も残らず打込まなければ信するといふことにはならぬ。だからお釋迦様の教を信することは有らゆる佛を信することである、斯ういふ覺悟がなければ信といふものが確かりした根柢を有らませぬ。その事を此處で言つ

て居ります。お前達が本當の心持を以て、釋迦牟尼佛の教を信するならば、それは一切の佛を信することである。「三世の佛」過去、現在、未來に亘つて有らゆる佛を信することになるのである。「是の人甚だ希有なり」斯ういふ人はなかく得がたい。優曇華の花が容易に咲かないと同じやうに、本當に佛の教を信するといふことはナカク難しい。その難しい事が一番尊い事なのだから、その尊い事に向つて心を打込まなければいけないと言はれる。

汝等疑有ること勿れ 我は爲れ諸法の王
普く諸の大家に告ぐ 但だ一乘の道を以て
諸の菩薩を教化して 聲聞の弟子無し

(汝等勿有疑 我爲諸法王 普告諸大家 但以一乘道 教化諸菩薩 無聲聞弟子)

お前達疑つてはいけないぞ、佛といふものは有らゆる佛を皆自由自在に説く力があるものである。即

ち諸法の王である。さうして佛は但だ一乘の道を以て諸の菩薩を教化するものであつて、「聲聞の弟子無し」この聲聞の弟子無しといふことは低い教を聞いてそれで終るやうなものは佛の眞の弟子ではないと言はれるのである。そこが最も大事であります。宜い加減に途中で停つて、この邊で澤山だナンと言ふやうな人は佛様の本當の弟子とは言はれない。佛の本當の弟子といふのは、自分が少しばかり物がわかつたといつてそれで満足しないで、自分達が少しばかり世間に尊敬されるといつてそれで自惚れないで、佛様御自身と少しも變らないやうになる迄は、勉強して、信心して、研究して、少しも怠らない。それが本當の佛弟子です。聲聞といふやうな、佛の教を一部分だけ聞いて世の中の無常を觀じたといふくらゐの者は、それは本當の佛弟子ではない。そんなものを自分の弟子とは思はない。自分の弟子は皆菩薩でなければならぬ。即ち佛の境界に近づくこと

を理想として、自分一人助かるだけで満足しないで、世間の凡ての人を救はう、世の中の憐れな者を皆幸福にしてやらうといふ、その心持を有つて居る者だけがそれが佛の弟子なので、その心持を有たない者は自分の弟子とは思はないといふ、これは實に大切な言葉です。

だからお互ひに佛教を信する者はそこに心を向けなければいけない。佛様のお弟子になる以上、佛様の御心持を自分の心持としなければならぬ。佛は一切の人間を救ふことを目的としてゐらつしやるのでありますから、私共も世の中の苦しい者を救ひたい、世の中の惱んで居る者を助けて行きたいと思ふ。その心持があつて初めて佛の弟子なのであつて、その心持がなければ幾らお經を讀んでも、幾ら佛を拜んでも、佛は我が弟子ではないと仰しやる。「聲聞の弟子無し」自分だけ獨り行ひ澄して慈悲を以て人に接しない者は自分の弟子ではないぞと言はれるので

あります。世間では信心すると言ひながら、佛様に
向ふ時、佛様に背中にする時と心持の違ふ人が往
往にしてある。佛に向つた時には南無阿彌陀佛とか
南無妙法蓮華經とか言つて居つて、佛を背にした
時には「向ふの家が潰れて自分の家が繁昌すれば宜
い」とか「前に歩いてゐる奴が墓口を落したら後か
ら拾つてやらう」ナンと考へて居る。それでは仕様
がない、そんな者は佛の弟子ではない。世の爲、人
の爲に力を盡さうといふ心持の無い者は弟子ではな
いとハッキリ言つてゐらつしやる。此の言葉を吾々
は忘れてはならぬ。自分一人助かれば人はどうでも
かまはないといふ、そんな弟子は自分には一人も無
いぞ、斯う仰しやつてあるのであります。

汝等舍利弗

聲聞及び菩薩

當に知るべし是の妙法は 諸佛の祕要なり

(汝等舍利弗 聲聞及菩薩 當知是妙法 諸佛之祕要)

聲聞といふ低い教だけを聞いた者でも、菩薩とい

ふ高い教を聞いた者でも共によく聴け「是の妙法」
——世を救ひ、人を救ふ所の此の教といふものは、
それがいろ／＼な佛様の「祕要」といつて、心に籠
めて永く考へて居らつしやつた事だといふことを能
く知らなければならぬ。祕要といふのは、心の中に
籠めて居つて容易に説かれなかつたけれども、併し
ながらその佛が一たび説く時には、これは必ず凡て
の人に守らせるといふ自信を以て説かれるのであ
る。佛様の心の中に秘めた教といふものは、世を救
ひ人を救ふ教である。この事をお前達が皆確かりと
考へなければいけないと言はれるのであります。
この所は至つて簡単な言葉でありますけれども、
よく味はなければならぬ。「聲聞及び菩薩當に知る
べし、是の妙法」とあります。聲聞といふ低い教だ
けを聞いた者でも、菩薩といふ高い教を聞いた者で
も、結局は一切衆生を救ふ爲に力を盡させるのだと
いふ、この事を承知しなければならぬといふの

です。無論人間の力には限りがあります。又その人
の程度にもいろ／＼の差がある。佛の境界から非常
に遠い者もあるし、やゝ近い者もある。けれども結
局は皆同じ佛の境界に行かなければいけない。今の
所はその機根が異ふし、その境遇が異ふから、低い
教のみを聞いた人もあるだらうし、高い教を聞いた
人もあるだらうが、結局は佛の境界にまで來なけれ
ばいけないぞと言はれる。そこで「聲聞及び菩薩當
に知るべし、是の妙法は諸佛の祕要なり」是れが佛様
の眞のお心持だといふことを知らなければならぬ。
人間は自分で自分を侮つてはいけない。「自分達
はどうせつまらない者だ」……そんなことを思つて
はいけない。現在の自分は至つてつまらないけれど
も、だん／＼修行して行けば、結局佛様になれる
のでありますから、誰でも自分を侮つてはいけない。
自分を自ら侮る人は、モウこの邊で澤山だといつて
先へ行かない、これは全くいけない。と言つてまた
自ら慢する人は、能くわからない辯にわかつたやう

な氣持で、モウ先へ行かないのです。これは兩方と
もいけない。自分で自分を馬鹿にしてはいけない。
馬鹿にすればそれで先が闊へてしまふ。自分で自分
を慢してはいけない。慢すれば自分で満足してしま
つて、先へ行かない。自ら侮るといふ事と、自ら慢
するといふ事とは教を修行する上に於て二つの非常
に大きな障りであります。そこで自ら侮る心持を防
ぐ爲にはどういふ心持を有つかといふと、所謂法悦
であります。教を學んで行けばどこ迄も行けるぞ、
自分は今つまらない者だけれども、佛の教を學んで行
けば、今はつまらない者でも結局佛の境界にまで
行けるぞといふ、この悦びを感ずるならば、自ら侮
るといふことは無い筈であります。その貴い教に依
つて導かれるといふ悦びを感じないから自分で自分
を侮つてしまふ。「俺はモウこの邊でお終ひだ」……
……それではいけない。だから自ら侮る心持のある
人は法悦の大切なことを感ぜなければいけない。教
を學ぶことを悦ぶといふ念がなければならぬ。教に

依つて私共は今智慧が無くても智慧が生れ出て來ます。今は迷ひに鎖されて居りまして此の迷ひを除くことが出来るのでありますから、教に依つて教はれ導かれて幾らでも進んで行ける。この法の悦びを感ずることに依つて自ら悔むことを防ぎます。

それから自ら慢する人は慚愧しなければいけません。『ア、自分は足りないナ、恥かしいナ、折角佛の教を學んで居りながら此の邊で停つては恥かしいナ』と思ふ。『まだ偉い人が居るのに、自分の行ひの如きはそれに比べては逆も物にならない。アア恥かしいナ、これでは濟まない』と思ふ。この慚愧に依つて自ら慢する念を除きます。又法悦に依つて自ら悔り自ら輕んずる念を除きます。この心持をいつまでも持つて行きます。さうして足りない所は足らない所として明かに見て、善い所は又善い所として、自分で悦んで善い方をズン／＼伸して行く。斯ういふ風にやらないと、片方にのみ寄つてしまつてはいけません。甚だ言ひにくいことですが、現在の

日蓮宗とか法華宗とかいふ方の人は、法華經が一番善い經だと言つて悦ぶけれども、自分を振返ること知らない人が多い。だからどうも逆上し易くなつて困ります。『俺の方は本家だ』ナンと言つて、

本家が甚だどうも振はない。つまらない教を學んで居る人にも日常の行ひが劣るといふことになつては困る。といつて又自分を輕んじて、どうせ自分は駄目だナンと言つてガツカリしてしまつては進歩致しませぬから、一方に於て慚愧の心を起して自ら省ると共に、一方に於て法悦の念を養つて、自分の信じて行くところの佛の教といふものは尊いものだ、現在の自分はどんなつまらない者でも、この道を履んで行けば結局世をも人をも教へ導くことになれるのだといふ、この満足の心持を失はないやうに、一は自ら戒め一は自ら勵まして、さうして一歩々々とこの貴い道を進んで行く。斯ういふことになりまして初めて私共の一生が意味のあるものになる譯であります。

(第二十八講了)

(記) (事)

本部 團報

日生上人第六周年忌 本團總裁本多日生親下が御遷化遊ばされてより、早や六星霜を経過した。この間に世相は極めて急激の變化を見せらるゝのである。國民教化を朝夕筆に口にされて、ある人から本多上人は教化に手足が生へて居る方だと評した程、御生涯教化の淨業に専心遊ばして、國家に於ても超然たる教化者を新設するに非らずんば眞の國運興隆せないであらうと、相當御劃策があつたやうであるが、其の運びを見ずして逝かれたことは寔に残念に思ふ。三月十日陸軍の記念日に品川妙國寺に詣で、遂に今成老師をお見舞ひした時にも、老師は『本多親下が居て下さつたら』と涙を流して御述べられたのは共に貴ひ泣したのである。噂に依れば先頃の大本祥事件に参加せる者の中に、日蓮門下と稱するものありとか、曩の五・一五事件といひ新様にして 日蓮聖人は無智の輩に依つて偏狹に低劣に愚惡に引きずり落され給ふのであらうかと思へばとめ度もなく涙が湧き出る。嘘見渡す限り何處に眞日蓮義が受持されて居るのか、『合法久住』は虚言なのか、『雖有魔及魔民皆護佛法』は過去のことなのか、『我

今神通の力を以ての故に是經を守護して如來の滅後に於て圓浮提の内に廣く流布せしめて斷絶せざらしめん』との普賢菩薩も、この五濁の惡世には力及ばずとて見捨てられたのか、末法の爲め別付屬の大導師も七百年前にお顔出しになつて其の遺體永く及ばずといふことでは、其の慈念も薄いものではないか、『日蓮が慈悲廣大ならば南無妙法蓮華經は萬年の外未來迄も流るべし』とは一時の氣憤めか。旁かゝることを時代相に引當てる時に私共は、本多上人を憶ふの念彌々募るのである。而してこの祥月に際して志を同ふするものは、たとへ今は戒嚴令下にあつて一般の集會は遠慮するやうとのことであるが、冠婚葬祭は除外例とされて居るから、三月十五日の第三日曜日がお連夜に相當するので午後一時過ぎから品川の妙國寺客殿に、恩師を慕ふもの參集した。佐藤鐵太郎中將御夫妻を始めとし、御遺族を正賓として約五十名は一時卅分より惠まれた天候に浴しつゝ、墓前に妙國寺の大泉執事を中心として讀經唱題の御回向を捧げた。佐藤閣下は昨年の御異例から引續き御靜養中で殆んど外出は遊ばされないのであるが、而かも遠い府下吉祥寺から夫人に扶けられて御手下さつたことは甘涙禁じ得ない有難さである。又今成老師は矢張り病後でお詣り出来ないのは遺憾であると態々お傳言に預かつて恐縮した、どうか氣遣も調ふて暖かになれば、一日も早く御元氣になつて法國の爲めにお力添あらんことを願つて居

る次第である。

午後三時音羽の會館御寶前に於て小西日喜上人導師の下に恩師御遺族御親戚の方々や、小林一郎先生等五十餘名の莊嚴悲愴な法味を捧げ、その香煙縷々の中に、恩師の遺影を拜して感慨無量であつた。

同四十五分より磯部滿事氏司會者となつて追憶報恩座談會が開かれた。先づ始めに久し振りに顔を出された田中道爾氏は指名の下に起つて、最近自分の事業の多忙なことから其の中にも教を基本とし活動力の源泉として、そこに法華經を行ずるものと思ひ、儲用の人々にもこの精神を示して共に恩師の意志のある處を宣傳すべく誓願してゐると十分間講話をされた。次に遙々埼玉から参詣された『人生と法華經』の執筆者池ノ内三雄氏は、今日は時間もなく又自己の卑見は遠慮して、河合陟明氏の傳言である釋迦殿の件に付團員各位の御清授を要望するとの事が述べられた。

司會者は、折角皆さん遠路御多忙の折柄かく多数御参詣下されたのに、これと申すお土産を差上げることも協はず、幸ひ小林先生からよい法施の御供養をお願申上げます、従つて時間は十分講話でなく適當にとの挨拶で、起られた先生は忌憚ない洵に適切な二大教訓を、卑近な實例を挙げなどして簡結明瞭にお話し下さつた。これはいづれ機會に發表させて頂くと、要は物事をするには智慧を働かさねばたとへ其の動機は

が顯示されてないから、十人十色の見解は又止むを得まい。併し今頃そんなことでは信者の迷惑一層甚だしいものと、吾等熱議の結果 本多上人の往年大阪に於ける御講述の『本尊論』の基礎を成して居るともいふべき秘藏の『本尊論』を上梓して、門下の有志寺院數百ヶ所に贈つて其の高見を仰いだのであつた。私共がかゝる仕儀に出づることは或は滑稽だと思はれよう、又平地に波瀾を起すものだと敵視もされよう、併しそんなことは些細なこと、お互信仰上の最重要たる御本尊意識が不透明であつては、折角の精進も却て惡因を増長するばかりではあるまいかと思へば、一日も忽備に附する譯には參らない、勸信第一義のこの本尊觀は教師たるもの中心生命であると思つて護法愛宗の上から採つた手段であつた。毀譽褒貶は取賢にもある、況んや私共の凡愚毫も意とする所でない。幸ひに目下頂いた教師の御感想を左に摘記することをお許し願ひたい。

(いろいろ願)

岡山縣 本典寺 石井健一師

拜復 先般は『本尊意識に就て』一部御惠送下され難有拜受再三拜讀仕り感銘仕候

本多親下御一代の主張は顯本法華宗の主張と存じ居る者に有之候へば只々遵奉するのみにして批判すべき限りのものは無しと存じ居り申候

善であつても結果は惡に歸す、釋尊は佛智をお與へ下さつた信の本は慧にあるといふやうな意味の平易のお話のやうではあるが、其の中味は極めて深遠で、よく思ひ切つてお述べ下さつたと感謝した。時間は豫定の五時に二十分前であるから最後を結ぶべく小西日喜師を御紹介した。師は滿身の熱血を注いで言々何々肺腑より送り聴く者襟を正した。閉會に當つて和賀義見師又立つて自己の使命天職を五分演説された。未だ御感想を承りたい方が澤山にあり、殊に恩師の御近親の方から、猥下の逸話などもおありと思つて居たし、遠く山形方面からも参詣された村川氏、其他金澤方面時代のお話を本郷氏あたりから承りたく思つたが、時間の制限もあつて乍遺憾山口智光師の題目主唱に和して一幕閉ぢた。各自は御供養の小冊子と饅頭を懐に名残惜しく袂を別つたのである。

南無妙法蓮華經

本尊意識に就て 先年統一閣で我顯本教團の講習會が開催された時、三講師各々の本尊觀が不統一のやうに感じられたと憂慮を漏された二、三の人があつた。これは不思議のやうであるが、決して不思議でもあるまい、宗憲の第一條に於て本尊ハ佛滅後二千二百二十餘年ノ間一閣浮提ノ内未曾有ノ依正不二人法一體生佛一如ノ大曼茶羅ヲ信敬スとあるばかりで、この曼茶羅の内容に至つては其解釋の細説

誌て御禮並に愚感の一端を申述て乍延引感謝之意を表明仕候 再拜

千葉縣 立藏坊 石井信顯師

拜啓 先日は本多日生上人御講述に係る『本尊意識に就て』の御冊子御寄贈被下忝なく奉感謝候 是れに對し多少なりとも異議を抱く者ありとせば種々の意味に於て大に考慮を要する事と存候 小生の如き後輩は只々難有拜讀するの外無之候 不取敢右御禮迄如斯御座候 敬具

滿洲 妙光寺 岡松乾丈師

(前略) さて此度は日生上人著『本尊意識に就て』一部御惠與に預り誠に難有御禮申上候 目下拜讀中に有之何れ寸暇を得て感銘の點を採録させて頂き度候 右御禮迄 合掌

鳥取市 法泉寺 高田日暢師

謹復 益々御勇健賀上候 さて御惠與の『本尊意識に就て』の良書實に結構此上無之候 元來佛教は一代經全體が本門壽量の教主釋尊毎自の大慈悲よりして千變萬化の迹を遺したるも結局妙法(禪徒和合の)を以て衆生を救護し玉ひしものなるが故に良醫良藥の譬の通り今日吾々は其良醫を主として信頼し後藥を請ふて癒快するものと確信せざる可ら

す而して此良醫良藥具足の眞狀が大曼荼羅に光顯せられたるものと拜信し南無本佛大悲大慈哀護あらせ玉へ南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經と信行し上る大信妙信を決定し候また本書の本尊抄綱要實に明快晴天の白日の如く其外解説正當正義さすが近世日蓮門下の一大英師たる本多大僧正の指導なる哉と嘆稱獨り久うして止み難き處に御座候法華の大法は正宗の名劍にして之を使用する力量の劍客無き爲に却て木刀の他教團體にも劣る如き脆弱の言論文辭を輕卒に發表する徒有る事慨嘆に堪へざる處に候 法獨り弘まらず之を弘むる人に在り(以下略)

山口縣 長久寺 中村明法師

「本尊意識に就て」御惠賄に預り難有拜讀仕りました。本多親下に親しく教化を受くるが如き懐かし味を感じました私が始めて親下の高教を拜受しましたのは明治三十五年でありました。翌三十六年には高等宗學院に於て親しく御教化に接したのであります。最も激烈なる御教化を受けしは明治三十七年高等宗學院の一ヶ年でありました。親下の教導に熱心なる頑固の私に對し遂には罵聲となり怒聲となり此の金挺子頭暗者黨と浴せ懸けられたものであります、私も一度び論陣に立てば眼中管長なく大僧正なく唯正義の信念に住し毫も屈する所なかつたのであります。

或る時妙國精舎に參拜致しました所 親下は腫れたる指を示し、予は今法華經講義執筆中で此の如く筆を持つ爲め指の腫れる迄書き捲つて居るので何人にも面會謝絶であるが特に君にのみ話をするのであると申して四時間の永きに亘り熱誠を込めたる御教化に預つたのであります。かゝる特殊の御化導にも不拘私の信念は微動もせなかつたのであります。

其後十年種々論議の結果本尊義に依り憎籍剽奪となつたのであります(大正三年)

本多親下との相違點は

第一 久遠と無始

私の信する所は久遠は我實成佛の始めあり復倍上數の終あり即ち五百塵點久遠なりと雖も有始有終である此間の消息は數理觀念の乏しき坊主頭には解りかねると思はれます。

宗祖の御訓に従へば五百塵點乃至所顯三身にして無始の古佛也とあります。

能顯は 久遠五百塵點(文上ノ義)

所顯は 三身無始古佛(文武ノ義)

是れ位明瞭な御訓誨がどうして解らぬのか不思議でなりません。

第二 觀心本尊鈔の二種本尊

其本尊爲體本師娑婆上寶塔居空塔中妙法蓮華經左右釋迦牟

尼佛多寶佛乃至如是本尊在世五十餘年無之八年之間但限八品

本門壽量品ノ本尊并四大菩薩三國王臣俱未崇重之

此時地涌十界出現本門釋尊爲臨土一闍浮提第一本尊可之此

前者は八品の本尊にして後者は壽量品の本尊たる事文に就て明かなり何が故ぞ八品の本尊を指して壽量品の本尊と自他を誑惑するや

次に本論に入りて法・佛・己心の三本尊を説かれてあります、是は宗祖御指南の通り題目本尊、曼荼羅本尊、釋尊本尊と類別するを正當と存ぜられます。

本尊問答抄 法華經の題目を以て本尊とすべし。

日女御前御返事 抑も此御本尊は(曼荼羅)在世五十年の中には八年、八年の間には涌出品より囑累品迄八品に顯はれ給ふなり。

報恩抄 日本乃至一闍浮提一同に本門の教主釋尊を本尊とすべし。

此の如く題目、曼荼羅、釋尊の三本尊を區別するが宗祖の御本意と存ぜられます。題目本尊は下種結縁の爲め、曼荼羅は觀心解説の爲め、釋尊は信心熱益の爲と存ぜられます。己心本尊とは文に在つて明かなるが如く、我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて或は己心の一念三千の佛造り

顯はしますかとありまして己心を本尊とする義にあらすして己心の妙法、己心の佛を本尊とする義と拜すべきが正當と存ぜられます。妄言多罪

金澤 本長寺 能仁一十師

謹白 先般は聖應院日生上人の御論作「本尊意識に就て」の冊子を數ならぬ小生へ迄も御頒布且つ讀了後の感想を求められた點も事日蓮教學上高等教義に屬する問題にして、さればこそ古來宗門學者間に異説異論數種にして止まらざるの狀況に有之候 故に小生の如き不學文盲の徒輩の容易に感想など申述ぶるの洵に烏滸ケ間敷を覺え候へども日生上人より直接教化を受けし一人として或は貴團の要求する感想外の問題に亘る懼れなしとせざるやとも存候へども左に一言申述候

日生上人の晩年に於ける御活動の内容を洞察するに、本佛釋尊に對する絕對の信仰を高調されし様に見受けられ候 従つてそれを光顯するため有ゆる論點よりして本佛中心の問題を鮮明にされ候ことが俄然日蓮門下の各教團人より「本多は什門流でありながら己れの開山の宗義に背反せる異論を唱へ出した」と喧々囂々たる輿論の中に偶々大正十三年大阪蓮成寺會場としを全國末寺の布教師其他公職者を招集し、顯本法華宗の名に於て開催されたる西部講習會

の席上、日生上人は『本尊論』の題下に講話され候ことが更に一段の拍車をかけし觀を呈し申候。亦實際多くの聽講生の中には（斯く申す小生も）

本尊論請の形式は、釋尊一體に改めた方が様々の面倒がなくてよい。

とさへ語り合ひなどせし次第なれば門外の人々より左様誤解されるも亦止むを得ざること、今にして考ふれば無理からぬ事と存申候。

併し日生上人の御眞意は斯く一般の人々が妄評せるが如き簡單なるお考より出でたる説にては無かりし事は御平素の御言葉のまに／＼充分に了解居候ひしも何がさて小生等の單純なる頭より且つ又何となく行詰れる教壇に一大センセイションを捲き起さんとせし血氣と教界は擧げて佛敎信仰の大義を忘れて釋尊を絶対の教主として渴仰せざる反佛教徒の態度に悲憤を懷きしとにかられて行動せしを慚愧し加へて、日生上人に對し率りても洵に申譯なき事を今更後悔致居候折柄此度『本尊意識に就て』の御刊行は此等の誤解を一掃する上にも、日蓮聖人の教へられたる正しき本尊觀を把握する上にも最も善き機會と信じ衷心より感謝の意を表し申候。

先は右御回答迄に 合掌

顯本法華宗管長 木村日保師
文書でお返事するよりも御面談の方が誤解がなくて宜しいと思つて缺禮して居ました、と前置して左の意味を語られた。

「本尊意識に就て」卓見を求められたが、自分としてはアノ中に記載されて居ることは獨り一本多師の論説と申すよりは、寧ろあれこそ我が顯本法華宗の本尊觀也と申したい。或る人達は本多師の大阪での本尊論を兎や角批評する者もあるが、其場合に私は師の爲めにいつも辯護して居た、果せる哉あれで明瞭になつた、自分は定によいものを刊行されたと感謝して居ます。等云云。

東京 常福寺 三上義徹師

合掌

大法宣揚の爲御精進の條敬謝この事に候

日生恩師御講本本尊抄一部御惠贈を辱ふし難有りに候現下特に本尊意識を透明に致すべき要有之候折柄御版行相成候て千古の明斷に接することを得せしめ候事裨益甚大の儀と存じ候

こゝに御挨拶申上度候 積首

以上の外に四谷の法恩寺の秋山師、布田葉王寺の齋藤師、

愛知當行寺の野中師、山形寶藏寺の村田師、北海道法華寺の白部師並に姫路妙善寺の森田師、麻布大長寺の小野師等から感謝の辭やら御高説をお寄せ下さつて居るが、既に木村管長の御感想を以て我教團の宗見も明かになつた次第で、今後は檀信徒も安堵して正見に住することを得るのは何よりも御同慶に堪へない。日生上人は莞爾として、「皆の者よ、シツカリ勉強するがよい」と仰せられてゐる氣がする。

法華經講座と日曜清集 戒嚴令の下にあるので、ある處では休講されてゐるやうであるけれ共、幸ひ當會館では心靜かに續講されてゐる、一面から見れば一層敎化を徹底せしめねばならぬと思ふ。有志は眞剣に法を求めて所謂立正安國の實を結んで頂きたい。偽日蓮義は此際大に警戒し排除せしめねば相濟まぬであらう。

各地敎信 は都合に依り、今回割愛させて頂きましたから御諒承願ひます。



寄附金維持及團費誌料領收

(自二月二十一日至三月二十一日)

一金八十四錢也	大阪 山乃神傳道閣殿	一金貳圓貳拾錢也	横濱 平井白轉車店殿	一金貳圓五拾錢也	小倉 東端 兼吉殿
一金壹圓貳拾錢也	横濱 吉村 頼治殿	一金貳圓五拾錢也	東京 高橋 義雄殿	一金六拾圓也	横濱 中村清兵衛殿
一金貳圓貳拾錢也	濱松 彦坂 寅吉殿	一金貳圓也	同 大多和たけ殿	一金拾圓也	同 中村 清一殿
一金壹圓參拾錢也	東京 本郷常次郎殿	一金貳圓也	東京 沼部彌太郎殿	一金壹圓也	東京 墨須源太郎殿
一金貳圓貳拾錢也	津山 渡邊 孝殿	一金貳圓貳拾錢也	大阪 荻野 慶三殿	一金壹圓貳拾錢也	同 伊藤 正信殿
一金貳圓貳拾錢也	大阪 綾仁 昌子殿	一金參圓也	東京 森川 泰修殿	一金壹圓也	同 唱行 會殿
一金貳圓貳拾錢也	静岡縣 川手 海洋殿	一金貳圓貳拾錢也	同 島 龜太郎殿	一金貳圓五拾錢也	神戸 丹生快太郎殿
一金貳圓貳拾錢也	東京 坂井 日好殿	一金壹圓貳拾錢也	横濱 日下部二華殿	一金貳圓貳拾錢也	東京 藤崎勲三郎殿
一金貳圓貳拾錢也	群馬縣 谷本 繁殿	一金貳圓五拾錢也	山形縣 村川源次郎殿	一金貳圓四拾錢也	同 釋 眞 誓殿
一金五圓也	東京 山田 英二殿	一金貳圓五拾錢也	市川 梅林 清殿	一金貳圓五拾錢也	同 仙臺 井上 才吉殿
一金參拾圓也	同 横山 正三殿	一金壹圓貳拾錢也	兵庫縣 笹倉鹿太郎殿	一金壹圓貳拾錢也	東京 万城 登殿
一金貳拾圓也	同 柴田 武治殿	一金貳圓貳拾錢也	新潟縣 村山 智全殿	一金貳圓貳拾錢也	横濱 箕輪嘉一郎殿
一金貳圓五拾錢也	愛媛縣 廣田 竹吉殿	一金貳圓貳拾錢也	東京 近藤 壽子殿	一金貳圓貳拾錢也	
一金貳圓貳拾錢也	高岡 林 長吉殿	一金貳圓五拾錢也	愛知縣 増井 昇殿		

右難有領收入帳仕候也

財團法人統一團會計

本多日生上人著書特價提供

聖語錄	改版 賜天覽	特價 送料共	金壹圓八拾錢
法華經要義	全	全	金貳圓五拾錢
日蓮主義心髓	全	全	金壹圓五拾錢
日蓮主義精要	全	全	金貳圓九拾錢
佛教の本質と其價值	全	全	金貳拾五錢
法華經要品	全	全	金五拾錢
日生上人レコード	全	全	金參圓廿五錢
日蓮聖人	全	全	金拾錢
本尊意識に就て	全	全	金貳拾錢
職部諸事通輯	特價 送料共	全	金壹圓七拾錢
本多日生上人	特價 送料共	全	金拾錢
勤行作法	全	全	金壹圓

河合勝明著
皇道と日蓮主義

定價一冊 金壹圓貳拾錢
送一年前金 金壹圓貳拾錢
送料共

東京市小石川區音羽町六丁目一七
財團法人統一團出版部
振替東京九四〇番

申込所

東京市小石川區音羽町六丁目
「教」發行所
振替口座東京一〇九四〇番

月刊「教」誌

定價一冊 金壹圓貳拾錢
送一年前金 金壹圓貳拾錢
送料共

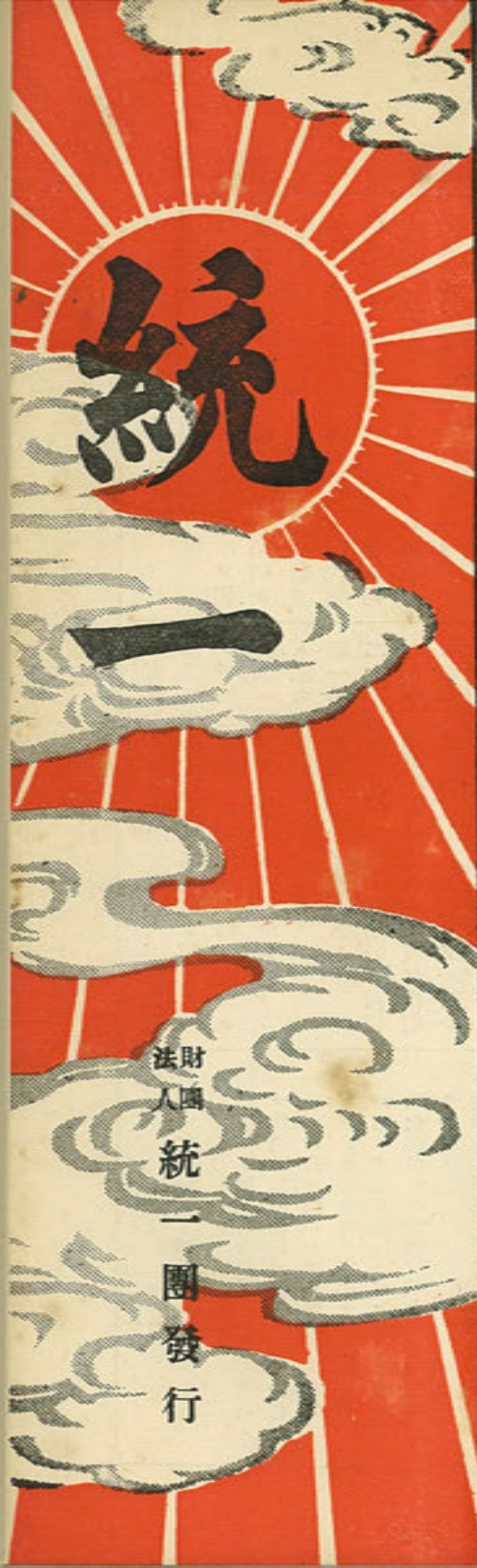
統一團定價
一冊 全貳拾錢 送料壹錢
一ヶ年 金壹圓貳拾錢 送料共

注意
御申込ハ總テ前金ノ事
御金相切候節ハ包紙ニ其旨表示可
御轉居ノ場合ハ必ず新舊共直ニ御
通知ノ事

昭和十一年三月廿七日 印刷納本
昭和十一年四月一日 發行
(第四百九十三號)

東京市小石川區音羽町六丁目一七
編輯兼 發行所 磯部 滿 事
印刷人 大辻 松太郎
東京市品川區南品川二ノ一八一
印刷所 都 印刷所
電話高輪六〇二四番

發行所 財團法人統一團
東京市小石川區音羽町六丁目一七
電話牛込五三三六番
振替東京九四二〇番



次 目

記事	法華經講話(第二十九講)	聖容思慕	即興詩	日蓮宗概觀(其三)	主師親の三徳(承前)
	小林一郎	冢二酉	野口日主	故梶木顯正	本多日生

○本團昭和十年度決算報告 ○本部團報其他